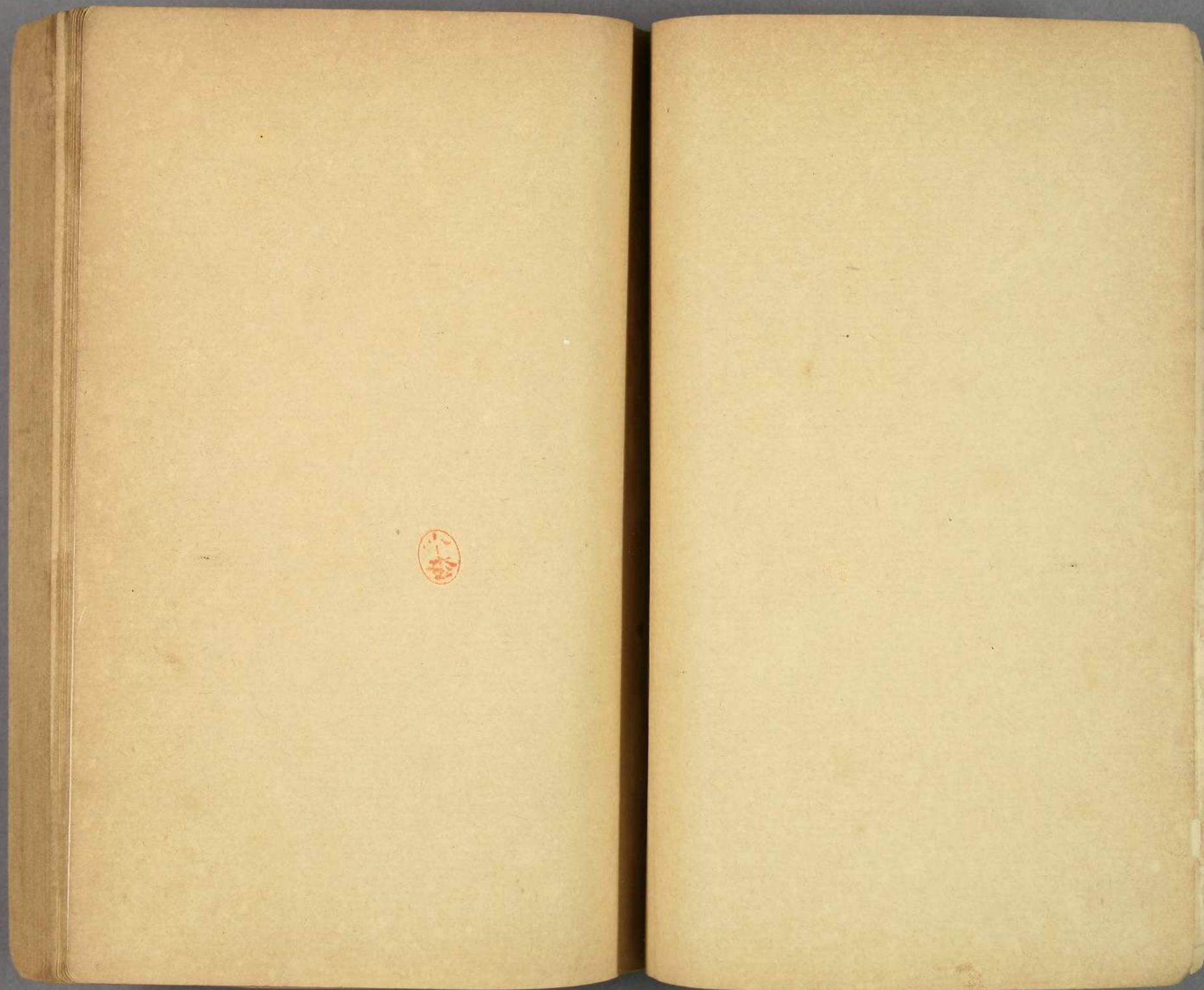
曉鐘

井上晩翠著

增訂十一版

東京堂發賣



土井晚翠著

曉鐘

東京堂發賣

曉鐘目次

萬里長城の歌……一
花上の露……一二
月と水……一四
惆悵吟……一五
夏の夜……一八
暗と眠……二一
秋興八首……二二
岸上の終焉……二九
白桃花……三一
平和……三三

弔吉國樟堂……三四
破船……四六
天上……四八
無限……五〇
黒龍江上の悲劇……五二
登高賦……六五
夕の姿……七二
おほいなる手のかげ……七四
不朽……七五
霹靂……八九
富嶽の歌……一二二

附録

汀上の逍遙……一三七
深淵……一四六
故郷の墳墓……一六六

曉鐘目次終

四十餘年睡夢中
而今醒眼始朦朧
不知日已過亭午
起向高樓撞曉鍾

王陽明

萬里長城の歌

土井晚翠著

一

生ける歴史か積もり來し齡は高し二千年、
影は萬里の空に入る名も長城の壁の上
落日低く雲淡く關山みすみす暮れんとす、
征驂悵み留りて遊子俯仰の影一つ。
絶域花は稀なから平蕪の綠今深し、

春乾坤に回りては空ことごとく霞み行く、
天地の色は老いずして人間の世は移らふを
歌ふか高く大空に姿は見えぬ夕雲雀。

嗚呼跡ふりぬ人去りぬ歳は流れぬ千載の
昔に返り何の地か今秦皇の覇圖を見む、
殘壘破壁聲も無し恨みも暗し夕まぐれ
春朦朧のたゞなかに俯仰の遊子影一つ。

二

三皇五帝あと遠く『六王終りて四海一』
四海の黔首ひれふして雷霆の威に聲もなし。

『わが宮殿を高うせよ』一たび呼べば阿房宮
『わが邊境を固うせよ』二たび呼べば萬里城、
春は驪山の花深く秋は上都の雲暗く
管絃の音雲に入る舞殿の春の夕まぐれ、
袂を擧げて輕く起つ三千の宮女花のごと
花を散して玉觥に浮かす歌扇の風もよし、
彫龍の欄奥深く薫る蘭麝の香を高み
珠簾を洩るる銀燭の光消えなで夜や明けむ。

西臨洮の嶺高しこゝ遼東の谿深し、
流を埋め山を截り壘を連ぬる幾千里
かゞりの焔天を燒き劒の光霜凝り

殺氣夏猶ものすごく守るは猛士二十萬
漠のこなたに胡笳絶えて匈奴の跡は遠ざかる。

三

『北夷の憂絶え果てゝ境は堅し國安し
先王の書も焚け果てぬ天下の儒者も埋まりぬ
わが萬世の業成りぬ』君王の思しかなりき。
知るや夜半の阿房宮後庭深く森暗く
歌臺の響よそにして獨りあらしのつぶやきを
『浮世の花の一盛り褪むるに早き色見ずや』

開け長城の秋の營旌旗の暗に消ゆるとき
またたく光露帶びて星の竊かにささやくを
『富も力も一場の夢覺め果てん後思へ』

四

春靜かなる東海の綠を涵す波の上
不死の金闕遠くして童女五百の舟いづこ、
絳霞の光天上の花とこしへに匂へども
土に下れば沈瀣の示すは獨り世の脆さ、
至尊の榮は高くとも名を玉籍に留め得じ
*金人十二鑄なせどもかれに無象のつるぎあり。

心を焦し身を碎くあゝ韓朝の一孤臣
爾の策は成らずとも無常の風はあらかりき、
天地靜かに夜更けて江流秋に咽ぶとき
獨り汜橋のかたほとり燃ゆる心もしづまりて、
思ふやいかに人力の脆きを命の定りを、
※鐵※椎血無し博浪沙鮑魚臭有り沙丘臺。

五

嗚呼死屍未だ冷えずしてかれ『萬世の業』いづこ
暗君嗣ぎて上に在り佞竪の害よなどあらき、
民の怒は火の如く戍卒は叫び兵は起ち
楚人の一炬閃めきて咸陽の宮皆焦土。

霽れざる空に虹懸けし複道の跡今いづれ、
雲あらざるに龍飛べる長橋の影はたいかに、
衰蘭露に悲めば遺宮空しく草の宿
驪山の麓春去れば花ことごとく涙あり。

斬蛇のつるぎ炎精の光もさはれ極みあり、
甘泉殿の夜半の月かれも浮雲の恨みあり、
其移り行く世の習ひ二京の花をよそにして
邊土に立てる長城の連雲の影あゝ絶えず。

邦は亡びて邦に嗣ぎ人は代りて人を追ふ、
鼎は移る朝二十歳は流るゝ暦二千、
中華幾たび烽擧がり長城の壁越え來り
また越え去りし蠻族の數さへいかに世々の跡。
山川影は替らねど春夢空しく跡も無し、
群雄の覇圖いたづらに殘すは獨り史上の名、
獨り邊土に影絶えず齡重ねて二千歳
殘壘苔に今青む長城の影尊としや。

民の膏血世の笑ひ虐政のかたみそれながら
歴史の色に染められし萬里の影ぞなつかしき、
其面影に忍びいで泣くは懐古の露のみか

暮春の恨み誰がために霞も咽ぶ夕まぐれ。

七

霞も咽ぶ夕まぐれ遊子俯仰の物思ひ。
北夷禦ぎし長城の昔の跡は替らねど
時世空しく流れては中華の姿明日いかに
秦漢魏晋移り行く昔の跡を引替て
西のあらしの吹き寄する黄海の波今あらし。

西暦一千九百年東亞のあらし明日いかに、
中華の光先王の道この民を救ひ得じ
愛を四海に傳ふべき神人の教いま空語、

看ずや虎狼の牙鳴す『基督教徒』血に渇き
群羊守る力無き『異教の民』の聲呑むを。

俯仰古今の物思ひ遊子の恨いつ盡きむ。
征驂悵み斷ける響きを返す壁のもと
思も遠く眺むれば霞たゞよふ大空の
自然の樂も絶え果てつ關山暮れて星出でて
恨を含む長城の姿は暗に呑まれ行く。
さらば別れむとこしへにわが長城の壁のもと
(盡きぬ思は大空の星の光に任せ置きて)
其星移る千載の時の流の末遠み
替らで影を尚とめむ殘壘にまた忍びでて

我世の今日を歌ふべき後の詩人はわれ知らず。

*** 嗚呼『永劫の脈搏』はいづれの時か鎮まらむ
人生舊を傷みては千古替らぬ情の歌、
破壁聲無き傍にまた落日の影を帶び
流るゝ光積り行く三千の昔忍ぶ時
かれ永遠の聲擧げて何の國語に歌はむか。

興廢移り悲喜まじる一人の跡一國の跡、
笑の蔭に涙あり暗のあなたに光あり、
玉樓の花風の恨み殘壘のあらし天の樂
千載遠き後の世の詩人よ既に君の歌

今も響けり長城の暗に隱るる壁の中。

（明治三十二年春稿）

（註）＊天下の兵器を收めて咸陽に聚め銷して鐘鐻金人十二を作る。（十八史略）

＊＊張良始皇を博浪沙に狙擊して成らず○始皇巡狩の途沙丘平臺に崩す、群臣秘して喪を發せず一石の鮑魚を以て其臭を亂る。（同上）

＊＊＊// Pulsschlag der Ewigkeit // Liebman 氏の句を直譯す。

花上の露

春のたましひ花とよび
曙の精露といふ。
雪より白き花の膚
汚に染まじ露の恩。

玉より清き露のしづく
碎けじ落ちじ花の恩。

春のあけぼの花と露
結べる契り誰が手より。

あゝ花露によりてゐみ
あゝ露花によりて生く。

月と水

山の端いづる夕の月
谷間流るゝ夕の水
天と地とは隔たれど
二つかたみにこひしたふ

影は親しくやどせども
むつみ語らんすべもなみ
月の恨みに空くもり
水の恨みに瀬はむせぶ

かくて空なる月の旅
かくて下界の水の旅
いつか望みの影そひて
流れは澄みぬ空晴れぬ

月は落ち行く西のそら
水は流るゝ西のうみ
海と空とは隔てねば
月と水との戀なりぬ

惆悵吟

其一

天女の胸に憑りかゝり
移ろひ果てし花束を
抛ち棄てゝわれ泣くと
見しもはかなの夜半の夢

覺めても熱きわが涙
拭ひもあへず窓あけて
見れば綠の青葉かげ
落ち行く月は圓からず

いみじきものははかなしと

今さらのるか夜半の鐘
音も霞の底深く
引かれて遠きわが思ひ

其二

花にあこがれ花に泣く
浮世の春は暮れにけり
霞む月かげ夜半のかげ
八重の櫻の木のもとの
短き夢をいかにせむ

さめずありなばあゝ戀よ

花散り果てし青葉かげ
今更清し夜半の月
昨日の影を戀ふべしや
今日の光をめづべしや
思に迷ふ人の子に
悟りをたまへあゝ神よ

夏の夜

はやたそがれの影寄せぬ
風おもむろに吹きかよふ
都大路の夏げしき

洗ひすてたる夕立の
名殘柳に玉とめて
まばゆく照らす電燈の
光はにほふ夜の花
湯あがり姿逍遙の
すがた幾むれ袖輕く
咽ぶはたかきローズの香
おほ空高く月いでて
八百のちまたの隈もなく
照す涼しき夏の夜や

雲はしづかに收まりて
殘る稀なる星のかげ

そゞろあるきに夜ふけて
袂は重し露ふかし
月なゝめなる時計臺
ふたつの針の重りて
うつも高しや時の數

傾きかゝる天の河
仰ぎて家路さして行く
逍遙の群あともなし

ちまたのあるじ今はたゞ
月の光と吹く風と

『暗と眠』

喘ぎ疲れて西ぞらに弦月遠く沈むあなた
劫初我世に造られし光照らざる森の中
『暗』と『眠』の影ふたつ
かれ氣を吐て人界の愁を夜半におしぬぐひ
これ手を擧げて煩へる天地を夢に誘ひ行く。

秋興八首

一陣吹きぬ秋の風、
雲より送る悽惨の自然の吐息たがためか。
山河姿を更めて非常も暮の色悵み
清怨堪へず聲を呑む詩人ことごとく涙あり。
誰か彩虹を攀ぢて空高く
淋しき下界の塵の色を
かみ銀漢の流に洗はむ。
嗚呼、一歌われすでに傷みぬ、
天は黃昏を帶ぶ一樣の愁。

『玉露楓樹』も秋の歌

杜陵の詞仙金鐘のしらべは餓を補はじ、
西歐の空眺めても詩神の寵兒みな愁
桂樹のほまれ綠葉の光は花の色ならじ。
枉げて兒童の師と詫ぶる垂翅は況して不似の分、
さらば滄浪の曲に人の世の窮達の跡を忍ばんか。
嗚呼、二歌われ我を嘆きぬ、
雲は殘陽を蔽ふ惆悵の色。

秋は更け行く青葉山故園の姿いまいかに、
扶搖のあらし音を絕えて雄圖は夢か五城樓、
桃李の盃の虧けしより三百年の春移り

山川の靈替らねど偉人の叫びまた聞かず。
波間の月の影冴ゆる秋は名に負ふ千松島
汀の寺に誰れか今訪はん英主の不死の魂。
嗚呼三歌われ郷を忍びぬ、
菊は荒園ににほふ瀼々の露。

扶桑の帝土千載の詩運は毎にうすかりき、
桂はな咲く西の空薫り比べんすべもなみ
さらでも脆き文の華今また秋に逢へるかな。
流水遠く春去りて谷に芝蘭の花摧け、
逸韻空にむなしくて九皐の鶴聲もなし。
月はすみだの秋の汐岸べのいほりいつまでか

蟄龍の息りに風雲の氣の潜めるや。
嗚呼四歌我文を愁へぬ、
風は簷端を拂ふ落葉の聲。

海若驕る秋九月。
浩々の水眺むれば思ひは遂に窮まらず。
波のあなたの邦いかに、
邦の眺めの數いくつ、
花は掩はん詩聖千古の墓
月は照さん雄都七丘の墟。
歴史の染むる長江の流れは廻る肥沃の土、
氷河を下す萬仞の峰は日に照る夏の雪

空しく夢に入り去りて今年の秋も更けにけり。

嗚呼五歌、われ西をしたひぬ、
畑は波上に横たふ長汀の夕。

帝都の春に背き去りし友は山川今幾重、
夢も迷はん邊城の搖落の秋、歌ありや、
やめよ世を泣く慷慨の涙は酒と化しもせじ、
一飽足らば昭代の民とも笑へ肱まくら。
白露に咽ぶ寒蟬のわれも音になく夕まぐれ
たゞ一片の雲の色に遠く千里の思を寄せん。
嗚呼六歌、われ友を惜みぬ、
影は遙空に迷ふ雁字の群。

一輪の明月に二千里外も暗からじ
高樓簾を捲き去り捲き去りて
關山のあなた異郷の空を思はばや。
三十六の峯青き舊都の夏の夕まぐれ
一葉の舟嵐峽の綠の流水澄みて
情は傷みぬ千載風月の色
文は論じぬ一代才人の筆、
歡會夢は長からで秋はそゞろに更けてけり、
嗚呼七歌われむかしを戀ひぬ。
露は松簟に滿つ銀蟾の影。

輪影西に傾きて九天の露聲も無し、
人間わが世明月の光は常に圓からず、
三千の素娥、瑤臺の舞曲は誰か耳にせん。
下界の絃歌いみじきはただ愁絶のしらべとか、
千載何の處にか理想は實に返るべき。
清夜の一歌たゞしばし秋のかほりを身にしめて
廣寒殿の風のねに蒼茫の思託さんか。
嗚呼八歌、われ曲を了へぬ、
月は星河を渡る五更の曉。

（明治卅二年秋稿）

※「只把春風桃季盃」仙臺藩祖の句、公の蹟は松島の瑞巌寺にあり。

岸上の終焉

白布のとばり拂はせて
涙にくもる目に見やる
夕海原はしづかなり
ひとつ東の暮の星
そはたましひの行くさとか

檐の松風さよなかに
叫ぶ恨はたがためぞ
ともしび暗し無象の世
見るかいまはの彼が目は

魂は半ばは過ぎ行きて。

あかつき清き八重の潮
汐路はるかに誘ふ風
雲を拂へばさしのぼる
朝日の影ぞまどかなる
途を迎ふや逝く魂の。

やがて黄金の波湧きて
すなどりの歌いさましく
四方に漕ぎづる白帆舟
其舟遠し波のあなた

其魂遠し星のあなた。

白桃花

朝日影そふ淺みどり
谷間を過ぎて聲高く
清く流るゝ春の水
みなもに戀と思とを
春もろともに浮べさりて
白桃の花いづち行く。

消えせぬ雪の色みせて
羊ひとむれ草飼へる

流に添へるみどりの野
まひるの空に夢みたる
牧の子笛を捨てゝ泣きて
白桃の花去るを見る

百の柴舟しらほ舟
こむる紅夕霞
廣き流れのかた岸に
綠暮れゆく青柳
柳のもとに流れよりて
白桃の花また去らじ。

平和

海に黃金の波を湧かし
空に焰の雪を染めて
しづかに落ち行く夕日の姿
見よあめつちの胸の中
おほいなるもの彼にあり。

海にうつむく影をてらし
空にいみじき香を吐きて
岩かげにたつさゆりの姿
見よあめつちの胸のうち

うるはしきもの此にあり。

おほいなるもの光を射
うるはしきもの色を染めて
夕にみつる愛と平和
花は落ち行く日を慕ひ
日はたゝずむ花を戀ふ。

弔吉國樟堂

一

玉輦花を積みのせて霞に沈む春の神
別れを遠く欄に憑り流にのぞみ眺めやる
空銷魂の色深き五城樓下の夕まぐれ、
幽蘭むなしく香をとめて白玉樓に君ありと
都のたより一封の涙の痕は夢ならず。

嗚呼白日の飛び行くを誰かは空に留め得ん、
夢を抱きて流水の光を慕ふ香をはやみ
散りてはかなき人生の花の行方や今いづこ、
綠は烟る一望の柳眠りて聲もなし。
雨を含める夕ぐれの雲も有情の色にして
青山花を葬りて夕の森に月黑し。

無心の調か牧童の姿は見えぬ笛の音、
暮天の暗に包まるゝ愁への耳に聞きとれば、
萬古盡きせぬ人の世の恨を述ぶる靈の歌
閻浮のよその泉より思を汲むに似たりけり。

二

昨日は齡二十六、けふは永劫の郷の靈、
芳蘭花は脆うして運命の神ねたみあり
一瞬の前君ありき、一瞬の後君あらず。
四歳都の假やどり、契りし道は淺からず、
斯文の光仰ぎ見るひとつの窓の影ふたつ

其影ふたつ人の世に今百年の別れとや。
夕日いろどる不忍の池の汀のさゞれ波
岸の逍遙袖かろく手を携へし日もむかし
隅田の堤夕ぐれの朧の月も散る花も。
思ひいためる雪の暮正月京をたちいでつ
忍が岡のあけぼのを、またも共にと契りけん
名殘の聲は春風に今もひゞけど人あらず。
昨日は山河九十餘里、今は生死の關幾重、
月の光の名にしおふ、千松島かげ波のへに

夏を忘れて歌はんと契りし人はいづこぞや。

三

都を思ふ今更に、母校の春の夕げしき、
朱門の垣は深緑、楊柳のかげ暗からむ、
ゆふべ花咲く電燈の光まばゆき玻璃の窓
百千の卷集め來て探れる世々のあとかたや
それはた空し學の海さ*きのあらしを傷みきを。
あゝあゝ細く光ある雙眸の星消え落ちて
かたみと殘る一塊の灰のみ鄕に今歸る、
火輪大地を馳けり行く東海の羇五十三、

生時のむかし仰ぎ見し希望のかげの富士の嶺
今は愁への雲閉ぢて神祕の色や深からん。
薩摩潟波のあなた、夏や來ぬらし古城の夕、
新なるその墓あらたなるその綠
やがて照らん春を忍ぶ半輪弦月の光、
やがて聞かん血に叫ぶ千聲杜鵑の恨、
これより南樓夢常に短からむ。
これより西海波とこしへに咽ばむ。
かくて三尺の塚ひとつ(恨や凝りて石と立つ)
悽怜の面とゞむるはたゞ薄命の夢のあと、

是より日々に深み行く苔の綠に花も無く
泉臺暗くとこしへの夜にむくろはしづみ行く、
土にむくろは歸り行く――魂の行くへはいづこぞや。

四

こよひ淋しき雨のおとに愁は花の上ならず、
天地の染むる暗の幕にこもるは人の世々の思ひ。
名も日ぐらしの里のゆふべ烟と消えしかたみの雲
しぐれてこゝに我宿に花を摧ける雨と降るか。
のきばのしづく夜半の窓に無韻のことば何の恨み

ともしびなれも心ありて忍ぶか過ぎし人のなごり。
しづくの音も絶ゆるとき更に『靜寂』の語る思ひ、
ともしの光消ゆるのち更にさゝやく『暗』の言葉。

五

油は盡きぬうばたまの暗のころもに纏はれて
花しぼみ行く床の間のあやなき薫り身にしめつ、
聞くは友呼ぶしめやかの遠き蛙の夜半の歌、
流轉の聲と姿とに波咽び行く廣瀨河。
天地に盡きぬ永劫の神祕のといき又こゝに

名殘の春を逐ひやりて愁ふ一陣夜半の風、
夢こそさわげ昨日まで色はにほひし花の窓
その窓押せば暗深く今や『無限』の影ひとつ。

萬古の光動きなき北斗こよひは見えわかず。
珠貫貝聯天狼の影やいづこの空のはて、
くしき力の蒔くところかなたに靈の邦ありや
そこに不盡の春ゑみて石ことごとく歌ありや。

こゝに愁の花咲きて涙の谷に霧晴れし、
こゝに移ろふ春の世に契短き塵ふたつ、
ひとつ跡なく消え失せて祕密のかどをくゞり行き

ひとつ名殘の夢さめて永き思に沈み行く。

六

思よ始まる何の郷、愁よ終る何の邦、
銀河のよそか星のよそか、空の海やむ雲のよそか。

千萬の生千萬の死、無限の起り無限の亡び、
かくて流星の影も消えぬ、かくて三春の花も枯れぬ。

黃金の色見るめ眩む夕の雲もかくは褪めぬ、
白銀の光霜こほる夜半の月もかくは落ちぬ。

七

幽淵暗く億劫の生を呑み去るそはなれか、
死よ蒼白く電光の雲間かすかに馳けるごと
塵界の中閃めきて無常をしめすなれの影、
哲學光薄くしてその神祕を穿ち得ず、
宗教迷多くしてその眞相を悟り得ず、
紅雲褪めて瑤臺の曲はわが世の風と荒れ
彩虹斷えて天上の春は下界の花と散り、
劫灰絶えず吹き拂ふ世々のあらしに人の子は
たゞ力無く眼を擧げて天のあなたを夢むるよ。

愁へよもだせ百年の齡短し人の春、

嘆よ眠れ煩惱の力かよわし墓の淵
穹窿高く黃金の光を凝らす神の子の
またたく眼に閉ぢこもる不言の敎讀めずとも、
喜べるもの笑めるもの傷つけるもの泣けるもの
すべての上に下り來る平和のめぐみあゝ思へ、
あらしよ雲よ散る花を誘うて遠く行く水よ、
行きて大空暗の中に去りて大海波の底に
倦みし疲れし困みし我世の夢の旅終へよ。

嗚呼夢深き人の子の悟りに遠き空のあなた、
有象の世界幾萬の群を包める空のあなた、
誰かは拒む想像のするどき羽も猶たゆき、

幽玄微妙圓滿の高き無象の邦無しと、
天の光を閉ぢかくすあだなる人の屋を出でよ、
靈の光を蓋ひ去る僧と俗との聲捨てよ、
人籟斷えて暗深き夜半の空に佇めば
天地しづかに靈籟の無絃の琴をかなでいで
人の心の底深く聲は囁く『たゞ信』と。

（明治三十三年暮春稿）

＊彼が大學院に於ける專攻の學科は歷史なりき。
＊＊昨年彼が同鄕の秀才某、史學を修めしものまた幽冥の客となりぬ。

破船

半輪の月斜なり
地平線上雲黑く
形さながら世を笑ふ
惡魔の影に似たるかな
破船のへりを洗ひさりて
波はむなしく立ちかへる。

波また寄せてまた洗ふ
折れし檣やれし舟
語るは何の悲劇ぞや、
叫喚の名殘たゞあらし、
月すさまじしかばねの

殘れる數に青白う。

自然の力波の力
引きてしづめて海底に
ふたつの影を呑まんまで
しばしは命か猶殘る
あゝ破船の姿波のこなた
あゝ半輪の月波のこなた。

天上

光のおほ海、色のおほうみ

千百萬の日を集めて
熔すに似たる波のかたはら
神人碧玉の板とりて
焰の筆に鑄るは日記か
『あした——星雲さめぬ、
太陽の光てりましぬ、
地球の泡生れいでぬ、
樂園の花さきそめぬ。
『ゆふべ——星雲なほさめぬ、
太陽の光衰へぬ、
樂園の花うつろひぬ、

地球の波は碎けぬ』と。
天上高し日ひと日、
下界幾億の歳か劫か。

無限

あらしの鞭に花泣きて
胡蝶の夢もさめはてつ
春のひかりはうつろへど
仰げば理想の空高く
『無限』は照りぬほゝゑみぬ。

人のつぼみのをさなごの
いまはの床に母は泣く
家の光は消え行けど
仰げば理想の空高く
『無限』は照りぬほゝゑみぬ。

尊き道の名によりて
罪なき血汐すゝられつ
敎へのひかりくもれども
仰げば理想の空高く
『無限』は照りぬほゝゑみぬ。

黑龍江上の悲劇

（註）頃者、客の露領ブラコエチエンスク府より歸り來るあり、就て同市の悲劇の眞相を問ふ。客愁然として語りて曰く、同市附近一帶の岸は清人の屍累々として惡臭鼻を衝き啾々の鬼氣人を襲ひ慘憺としてうたゝ行人の腸を斷たしむ。八月二十日余等一行の武市に着してより滯留殆んど十餘日、其間アイゲンの煙燼は遠く天に連りて尙未だ止まず、一脉の黑煙は濛々として遙かに大市邑の昔を想見せしむ。露曆六月一・二の兩日清兵武市を砲擊したりと稱する跡に就て之を見るに、僅か或民家の一端を損じたるに過ぎずして露人當時の騷擾却て怪訝にたへず、軍務知事グリブスキイ中將は武市清人の內應を慮り、同四日一隊の守備兵を全街に出して清人を捕縛せしめ五千餘人の老若男女を狩りて黑龍沿岸に送り砲火と江流とを以て悉く之を燼せり、武市の清人五千、內潛伏遁竄命を全うせしもの僅に五六十人に過ぎず（明治三十三年九月十九日東京朝日新聞、同廿一日ヂヤツパン・タイムス等參照）

一

大江流れて四千露里水は長空の影ひろく、
震烟迷ふシベリヤの南を遠く貫きて、
末韃靼の海に入る黑龍の流萬古の波、
記せよ——西曆一千九百年、なんぢの水は墓なりき。

五千の生靈罪なくてここに幽冥の鬼となりぬ。
其悽慘の恨みよりこの岸永く花なかれ、
千載これより大江の名、罪の記念に伴なれよ、
萬世これより大江の線、東亞の地圖に血を染めよ。

犧牲は平和の清の民賊は兇暴のコサツク兵
その豺狼を狂はして群羊をかりしものやたぞ、
『露軍の中將グリブスキイ』怒の波に名をのせて
四千里遠く大江の水よ四海に奔り行け。

あゝあゝ、なんぢ殘虐の將虎狼の兵、
千秋何の處にかよそになんぢの類を見ん、
上帝の怒盡くるまで、大江の流涸るゝまで
その罪惡をとこしへに萬邦の民よ、皆詛へ。

皇天の光亡びずば『歴史』よなんぢの責思へ、
嗚呼、鋼鐵の筆とりて正義の女神永劫の
おもてに既に記せるを君戰慄の目に見ずや、
『西暦一千九百年、黒龍の水血なりき』と。

二

いま天がける『想像』の無象の翼身に借りて
恨も長き黒龍の岸のきのふの姿見よ、
煙塵空を暗うして一隊の虎狼かけりきぬ
大江の音どよむまで見よ號哭を天にあげ
老幼男女いましめの繩に驅らるゝ數五千。

同胞五千いくとせかこゝの異郷のかりずまひ、
錦文ゆふべ窓に入る故園干戈のおとづれに
思いためる夜半の夢あけぼの近くおどろけば
翼ならして荒鷲はやさしき鳩の巣におちぬ、
牙を揮うて豺狼は羊の檻に襲ひきぬ。
六軍の王師賊なりき軍旗のほまれいづれぞや

掠奪つきて驅られ來し清人五千途いかに
大江の水、天ひたすこゝ黑龍の岸のうへ、
まなこ焰に燃えひかる虎狼ひとしく哮え立てぬ。
『平和を破る清の民、とく江を越え鄕に行け』

群鴉亂れて聲あげて羽雲に入るは彼もたじ、
舟やいづこ、橋やいづこ、清人泣きて訴へぬ、
『順良の商估清の民、いかで平和の敵ならむ、
流は墳墓、大江の逆捲く波を君見ずや』
虎狼涙に和がじ、露人の答たゝ砲火。

いかづち落ちぬ、白日の光は暗と消え失せぬ、

天の萬象ことごとく怒のあらし吹きさりぬ、
雨か彈丸の空飛ぶは、夜か硝煙うづまくは、
伏屍は岸に山を積み、溺屍は江に水せきて、
聞け號哭と叫喚と、天地は今か修羅のちまた。

恩愛の父子手を取りて奔流の波にさらはれつ、
新婚の夫妻抱きあひて虎狼の兵に屠られつ、
泡の大水に消ゆるごと粃のあらしに散るがごと、
藁の猛火に燒くるごと蠟の焰に熔くるごと、
恨を呑みて罪なくて逝けり平和の民五千。

江流逝いて波暗し浮べるかばね今いづこ、
去れよ四千里わだつみの底は露人の影なきに
去れよ長鯨潮を吹くあらび露人にしかざるに。

岸のしかばね青白く鉛に似るを誰か見る。
齒をくひしばり虛を握み砂泥にまみた血に汚がれ
天を仰ぎて倒れ臥す慘憺の姿たれか見る。

綾羅ひとたび紅の花を包みし袖いかに、
銀鬚きのふは幼子のゑみを抑へしおもいづれ、
無垢はさながら白蘭の蕾に似たる魂いづこ。

其さま見じと『夕ぐれ』はおもてを掩ふて過ぎさりぬ、
『夜』よ、あらしに吹かれきて暗のころもに彼を蓋へ、
陰火亂れて啾々の魂は恨に堪へざるを。

千秋ほかに比なき悲劇のあとはかくなりき、
いざや陰府の火を逃れ血汐の壺を傾けて、
サタンよ祝せ、人の世になんぢのよさし尙盡きず。

四

萬馬のひづめ飛びちがふ兵火のあらびいくたびぞ、
敎徒の怒り血に燃えて倒れし犧牲いくばくぞ
さはれ史上の幾千の時の記錄に見るべきや、

神を崇むる大帝の六軍の師故なくて
羊に似たる外邦の五千の民を屠れるよ。

見よ幻を天の中、銀鬚かゞやく一巨人、
無限の光胸にあり、鮮血のあと足にあり、
『われ東西の文明の光を一にあはしてき、
露人の罪にわが終、見よかくまでに汚れぬ』と、
「たそやなんぢは』彼答ふ『十九世紀の靈を見よ』

玉殿の夜静かにて星斗まぶたの重きとき、
錦繡のとばり暗うして香のかすかにくゆるとき、
高塔の鐘しづまりて侍衛の夢の深きとき、

東亞の領のおとづれに寶冠ひとつひれふして
その民のため國のため罪を萬軍の主に謝せよ。

五

嗚呼五千の靈、清人と彼れ生れしや何の罪、
彼牛羊に劣りしや彼禽獸に類せしや、
覆載の恩、故ありて造物彼に拒みしや、
さきは一たび無知の暗、頑冥の夢さめやらず、
血を宣敎の二師に染め罪に一州の地を替へき、
いま朝政のかげもなき國歩のなやみ時の不利、
『同胞五千罪なくて異郷の暗に魂泣く』と
率土いづれの處にか彼はた寃を訴へん、

嗚呼、北極よ、南極よ、萬邦の民の良心よ、
基督教の道徳よ、十九世紀の文明よ、
告げよ――皇天の正義今無きや。

六

世界の義人聲なきや、爾の耳は聾ひたりや。
基督教徒たゝざるや、四海同胞の訓いづくぞや。
普天の詩人鋼鐵の一絃すでに絶えたりや、
かれパトモスに現はれし幻今は跡なきや、
さきにシオンに照りいでし光は暗に沈めりや。
人種のはだの白か黄か差は愛憐の妨か、

神にふたつの道ありや、愛にふたつの別ありや、
『愛の敎の一の民罪なきわれの血を流し、
愛の敎のほかの民皆そのわざをよしとしぬ』
異敎の民の訴をわれ願くは聞かざらむ。

その悽愴の訴を無情の耳にきかむ前、
震へる魂よ、ひれふして高き至聖の名を思へ、
時は遙けしいにしへに返る一千九百年、
橄欖山の夜半の暗にあらしも泣けるゲッセマネ
そこに憂の盃うけて祈りし影をあゝ思へ。

嗚呼事終り罪なりぬ、千秋の悲劇かく過ぎぬ、
なんぢ無象の羽かろき黒龍江の岸の風、
九天のあなたセラヒムの萬軍の列かきわけて、
咽ぶ銀河の波と共に永く露人の罪鳴らせ、
なんぢ滄溟の水に入る黒龍江の波の音、
五千のかばね葬りし流の響たえずして、
四海の濱にとこしへに高く清人の寃を喚べ、
七星北斗十二宮、夜半の光滅びずば
神人共に憤るこの兇戾の罪しるせ、
寃を憐む百世の義人、なんぢに聲あらば、
東亞の圖上大江の線を血汐に染めていへ
『西暦一千九百年黒龍の波此の色』と。

登高賦

玉露しづかに降り來て乾坤こゝに秋を見る
歳は明治の三十三、西暦まさに千九百、
太虛のおもて永劫の上、人界の爭未だ盡きじを。
さはれ見よ萬古の眞、自然の色はとはに澄む、
天地蕭森の氣を湛へて山川遠く畫圖を披く
五城樓外西丘の夕、思は縹緲の空に入る。
あゝ今江山秋に入るその秋の精、秋の風、
吹くか星斗の震ひ動きて靈の如くに消ゆる空より、

太虛の呼吸清く遠く空に搖曳の雲を拂うて。

星雲の影こほらんとして銀漢の波咽ぶほとり、
天上秋の光引いて今搖落のわが世に下り、
遠く鴻雁の列を誘ふて下界の山河いづれを經るや。

楊柳の岸かげうすくセイヌの流咽ぶ處、
菩提樹畔の逍遙の群も夕に消ゆるほとり、
弦月旗はしづむボスホル海峽の暮、
牧笛聲は愁ふ中央亞細亞の野、
行いてシベリヤ大荒の東、黑龍の水萬古咽んで、
神人共に憤る蠻族の罪をかたる處、

去りて黃海の波を越え、長白山の雲を拂ひ、
更に遙に扶桑の空に玲瓏清き富士のたかね、
其影やどす東海の名も清見潟田子の浦、
鏡とすめる波のおもに秋をしらして過來しや。

白蘋の州、紅蓼の岸、漁翁の夢の清き處、
鮮血の流屍體の岡、文明の鬼の狂ふ處、
山川風土互に替る大地の旅幾千里、
玉殿のゆふまぐれ醉生の夢を驚かし、
落葉の夜半の窓詩人の情を動かして、
中天搖曳の雲と共に吹きさり吹きくる無限の秋風

五城樓外西郊の夕、その秋風の聲に色に
高きに登り眺めやりて獨り悠々の思つきず、
英雄の覇圖猶あとをとむる廣瀨の流青葉の森、
水は寒山の影をひたして溶々遠くはしるあなた、
碧は深し萬里滄溟の水、其波を越え海を越え、
行く行く吹きて雲を拂ひ思を誘ひ詩を含み、
天地の呼吸清く遠く無限の旅を追うて進まん。

千叢のすゝき波を亂して滿山の秋今まさに深く、
夕陽いつか西に入りて餘光の遠く溢るゝ處、
山河自然の雄麗に寫すは天上無窮の榮か、
その雄麗の景に對し、この清冷の風に吹かれて、

思は長し氣は遠し、——塵骸しばらくは聖かれよ。
人間歷史ありてより星移り行く五千載、
進化のあとは短くて禽獸の域遠からず、
一塊の地球今も猶たゞ反嚙のにはとして、
愛の權化の敎の祖基督世紀第十九、
その最後の秋風はこゝに悲哀の曲と吹く。

詩人哲人いくたりか我世にいでて道說ける、
靈鷲の峯に法の歌、橄欖山に愛の聲、
オレブ、シナイの嶺の上、アラビヤ、ペルシヤ野の邊、
光は暗にかゞやきて名あり言あり道ありや。
遺流千年遠くして今聖壇の焰消え、

博愛の教悼むべくたゞ呑噬の具となりて、
虎狼みだりに滔天の罪を文明の名に犯す。
妻は瀆され身は斬られ國は削られ屋燒かれ、
天を仰ぎて血に咽ぶ民よ『異教』は何の罪、
大義を叫び唱ふべき輿論の聲ももだせるか、
良心の痲痺に耳聾ひし基督教徒何の名ぞ。
美妙の天地かくて猶たゞ流血の場として、
世紀最後の秋風は悲哀の曲と吹き去るか。

嗚呼おほいなる無窮の靈、
天を張り、海を舒べ、雲を卷き風を吐き、
日月を驅り山嶽を震ひ、
千萬の星を鑄て千萬の世を治め、
風にありて吟じ人にありて歌ひ、
花にありてゑみ、星にありて照り、
俗僧遂に悟らざる、迷信遂に汚さゞる、
宗派おのれに占め得ざる、空理ひとへに知り得ざる、
愛の神、進化の神、詩人の神、
爾の胸にわれよりて爾の靈にわれ祈る。
合理必ず現實に、現實必ず皆合理、
有情の天地いつまでか常に混擾の局として、
人種の差異に同胞の四海の愛を壞るべき。
爾の呼吸願はくは天のはてより地の隅に
吹き來る無限の風として禍惡悉く吹き拂ひ

光と愛と詩とをして永く此地を掩はしめよ、
世紀新に替る後、秋風愁の曲ならで
あらしの聲も天上の無窮の樂とひゞくまで。

夕の姿

鐘のひゞき、水のひゞき、
うするゝ光、うするゝ烟、
あゝ別なり夕の姿。

去づまる風、收まる雲、
睡る花、覺むる星、
あゝ別なり夕の姿。

無韻の歌、無窮の敎、
無聲の樂、無限の思、
あゝ別なり夕の姿。

あゝをさなごが甘き乳を
愛を湛ふる母の胸に
頭をよせて眠ぶる如く
『夕』のころもの裾のひだに
浮世の煩ひ浮世の惱み
つゝみて靜かにわれは休まん。

おほいなる手のかげ

月しづみ星かくれ
嵐もだし雲眠るまよなか
見あぐる高き空の上に
おほいなる手の影あり。

百萬の人家みなしづまり
煩惱のひゞき絶ゆるまよなか
見あぐる高き空の上に
おほいなる手の影あり。

不朽

フイルドーシは西暦九百四十一年、波斯コーランサンの一市チウス郭外に生る。大王マームード四隣を蠶食し、威名を中央亞細亞に揚げしが、また文物典章を重んじて、ガズニの都に廣く學藝の士を集め、一朝フイルドーシの大才を認めて、彼に優詔を下し、波斯古來の神話傳説の逸聞歴史等一切を詩化して列王の英名邦家の偉蹟を不朽ならしめんとし、約して曰ふ、子が詩作一聯行ごとに一「トマン」(八圓餘の金貨)を以てすべしと、詩人この命を受てより慘憺の意匠を凝すこと三十年、六萬聯行(イリアッドの約七倍)の大篇を作り「列王詩紀」と題して之を大王に獻ず。大王よりて約せし金貨を與へんとせしに、佞人ありて之を阻め、金に換ゆるに銀を以てし、之を巨象の脊に載せて詩人に贈らしむ。フイルドーシ、王の欺騙を怒り、滿載の銀貨を分ちて悉く之を僕婢に與へ、孤身瓢然都を去りてまた還らず。しばらく浪々の生を送りしのち故山に歸りて形影獨り相弔ふのみ、白髮の詩聖歳已に八十餘、大王後にいたりて悔甚だしく、百頭の騾五十頭の駱駝に金銀珠玉家具服飾食品食料一切を積み、更に十二頭のアラビヤの駿馬と十二人の强壯敏捷なる黑奴とを添へ、侍臣に命じて行きてフイルドーシ

に贈らしむ。行程八日にしてチイスに着し、城の西門に入るときたま〳〵東門を出づる哀哭の列あり是フイルドーシの葬式なりき。

ハイ子嘗てこの題目を「ロマンチエロ」中に詠じぬ。左の一篇もこの史蹟を基とす。篇中引用のソーラブ、ラスタム父子がオクザス河畔の闘は列王詩紀中尤も沈痛なる一節なり。

一

ガンヂスの大河流れて
五天竺へだつるかぎり
大王の陵威の光
カスピヤの海に波なく
アラビヤの漠もまつろふ。
妖氛の晴れ行くあした
そゝぎくる四海の富に
王城は春の世盛り
並び立つ七寶塔は
紫の雲に冲りて。
落日の焔收まる
玉殿の夕のうたげ
玉盃の數を重ぬる
君王のおもわ照して
三千の花のともしび。
白日の光る胸より

ぬばたまの暗の生るごと
歡樂の極みより湧く
かなしみの黑衣の姿
あゝ王者なれも塵なり。

波たちし歌吹の海の
名殘今あらしに紛れ
「チブレス」の杜の蔭より
悠揚の悲歌のひとふし
『ソーラブの最期』を謠ふ。

弦月のかすかの光と

オグザスの岸をや照す
英雄も末は黃土か
マームード頭を垂れて
露しげき御階にたゝす。

紅血のうしほの流
湧き起る臟に鋭針を
貫ける痛も斯くや
哀吟の節に答ふる
大王の胸のゆらめき。

けたたましい御苑の孔雀

金繡も今は暗なる
夜深きに何の夢見る
星ひとつ空に流れて
曉に逝く魂あらむ。

『千載のむかしのほまれ
ラスタムの非命の子の名
千秋の後に傳ふる
入神のたぐひなき歌
彼なりきあゝフイルドーシ』

『われや王、かれや詩の聖

汀なる巖をうちて
荒波の碎くるがごと
爭ひし二つの心
われとかれ、あゝフイルドーシ』

『絶崖をひたに落して
觸るゝもの碎かざるなく
おとし來てわれも碎くる
大巖――怒もしかぞ
罪深し王者の狂』

『おも疵になするバルザム

焦土にそゝぐ夕立
わが悔の量をあらはす
千萬の寶集めて
慰めむ老のいまはに』

二

邊城のあしたの夢を
警蹕の聲に破りて
くれなゐの旗眞先に
野路遠く塵を亂しつ
幾百の騾馬に駱駝に
積みのすは何の寶ぞ

群を驅る御者の聲ぬも
嗄れぬ八日の旅路。

紫はシドンのたくみ
紅はタイルの錦
乳香と蜜と沒藥
百の瓶ナタルの油
ベンガルの沖の底より
拾ひしや綠の眞珠
オヒールの深き山より
穿ちしや濃藍の玉。

大漠の星夜の空に
たてがみの露を拂ひて
風と飛ぶ十二の駿馬
亞非利加の岸をはなれて
身のたくみ仇と賣られし
漆なす十二の黑奴
牽ゐさり牽ゐ來りて
隊向ふいづこの果ぞ。

三

澄みわたる心の空に
かゝるべき雲は無く

しづむ日を故郷に眺むる
白髮の詩聖のおもわ
靈の火の光に照りぬ。

天上の火輪の焰
天漢の名殘のしづく
破壞の『時』力合せて
碎くべし七寶の塔
破るべし帝王の宮。

ひとりわが建てし詩の城
千萬の人の心に

基おく靈の大殿
千載の末を俟ち得て
光のみいよゝ增すらむ。

三十の春また秋に
織りつぎし錦繡の段
六萬の聯行の文字
とこしへに世々の光と
萬邦の民は仰がむ。

塵寰の富にほまれに
煩惱の夢に迷に

大王の笑に怒に
いにしへはわれも狂ひき
今はたゝ靈のよろこび。

昇るにも猶もいやます
落日の比なき影
燦爛の無垢の淨光
照せわがいまはの姿
フイルドーシ世の業をへぬ。

四

チウスの城西の門より

『おほいなりアラーの徳』と
百の聲ひとしく叫び
亂調の樂のひゞきに
千萬の寶護りて
大王の使進みぬ。

東の門今過ぎて
咽び泣く笙鼓のしらべ
『休あれ逝きける魂に』と
祈りゆく黑衣の列
錦繡の榮をよそなる
木棺にあゝ大詩聖。

霹靂

（日本海々戰の一節）

海なり晴なり夕べなり。
夜摩天上の瑠璃の宮
黃金の塔、瑪瑙の樓
鏤ばめ粧ふ百寶の
色を、微妙のひらめきを
東海今見る暮の榮、
千波萬波のゆらめきに
鷗の羽も染まるまで、
水平線のひくきわみ

一面さながら虹霓の
焔と溶くるわだつうみ。

蜃樓の粧天の一方
崩れて波に入る如く。
その波染むるくれなゐの
あとも流轉のうたかたや、
漣漪は眠る花に似て
次第にこむる霧の海、
聖殿深く錦繡の
帳のおほふ大鏡
中に籠れる靈ありて

夕しづかに立ちあがり
未來の命を宣るごとく、
莊嚴神秘の影凝らし
うづまく暗に隱れ去る、
大海原のしづけさや。

＊　＊　＊　＊　＊

暗濤へだつる三百里、
潮あしたに合すべき
二つの水師、西東、
一つ黃海の沖の南
懸るは『破壞』のとき劍、
一つ對馬の沖の上

近きに笑むは『光榮』か、
渦卷く潮吼ゆる波
喚びぬ『戰今近し
龍王ちひろの淵出でゝ
鯨鯢百千の群狂ふ
あらびにまさる跡見よ』と。

渤海遠き北の天
波いま眠る旅順口、
あらしも冰る冬二月
八日夜半の波切りて
電光の羽雷艇の

飛びしこのかたいくそたび、
鬼神も泣ける壯烈の
跡ぞ、――陸には武の權化
節は稜々の秋の霜、
紅顏並びて地に倒れ
白髮ひとり影を弔ふ
恨それはた國のため、
仁は春風の花の恩
卒を見ること子の如き
將軍血に泣く夜々の思、
卒や幾萬、焦熱の
現世の冥府に飛び入りて

虚空をおほふ炎々の
鉛の雨に倒れしや、
嗚呼、光榮は虹霓か
照るは涙のしづくより、
盤龍の山、松樹の山
白玉の山、鷄冠の山、
鐵血山の形替えて
青燐白骨夜半に泣く
悲憤に買ひし天の險。
その港口今ねぶる
鋼鐵の巨骸夢いかに、
暗濤かすかに聲ありて

半しづめる舟縁に
告ぐるやいかに、『寄せ來る
千里あなたの艨艟の
爾の友も命盡く』と。

＊　＊　＊　＊　＊

北斗頭上に影高く
ネワの大水よどむ岸
冬宮夜半の夢成らず、
香霧みなぎる紅繡の
とばりの中に簿命を
悼むは誰ぞや、玉冠を
のする頭の重しとも、

十字架暗き大寺の
塔の頂鳴りわたる
鐘は叫びぬ『光榮は
われの響の時の數
時もろともうつろひ』と。

ペテルこのかた二百年
龍攘虎搏日も足らず、
ヤーヌス百の目を瞠りて
遙にひとつ東に
延びし雄略――黑龍の
あした鐵馬は渴知らず、

夕雲卷く長白に
飛ぶ雙頭の鷲の旗
その旗風に鴨綠の
流も遂に波立ちぬ。

何ぞや彈丸黑子の地
みだりに螳螂の臂あげて
われの龍車をむかひ打つ、
ウラルの嶺の森にして
手だれの木こり百錬の
斧に小枝を拂ふごと、
ネワの春波みなぎりて

殘る氷を汐あらぶ
北海遠く流すごと。
民は一億帝領の
雄師ひとたび地を蹴なば
東夷忽ち伏すべくと。

望は夕の空の虹
むなしく青にとけ行くか、
『ツエザレキッチ』『レトキザン
夜半の轟雷碎き去り、
鴨綠の固南山の塞
その日をへず落ちてより

百戰つねに我に不利、
東亞の覇府とまつろへし
金城湯池仇の手に、
遼陽奉天十萬の
肝腦ひとしく地にまみれ、
列世の略大露の名
むなしく夢と消え去るか。

あらしの沖のたゞ中に
破船の水夫狂はしう、
分秒ごとに沈み行く
甲板の波あらければ

半碎けし帆柱に
今はとよろめき攀づるごと、
最後の望あゝ爾、
殘の水師ひつさげて
クロンスタトの水門を
怒潮もろとも乘りいでし
あゝ魯提督いやはての
頼、なんぢの跡思ふ。

リバウの岸の玉の輦
龍馬あらしに泡嚙みし
昨日は未だ『アウロラ』の
光の影は沒らざりき、
鼓樂は空をゆるがして
三十餘艦艫と舳と
啣みし鐵の『レビアタン』、
あら浪切りてのりいでし
その運命のはて思ふ。

運命かれの手をひきぬ
潮路遠し一萬里、
水師わかれてそのひとつ
波は湯と湧く赤道の
圜をあなたに外の極、

十字の星の影のもと
亞非利加南の岸めぐり、
ひとつ歐亞の間の瀨戸
東に越して地中海、
長江スエズの水おそく
千里むかへる兩岸は
共に『シムーン』のあるゝ鄉、
遙に熱沙吹き送る
紅海の波つんざきつ。

いづれ南の極の天、
山より高く立つ波に

十丈直に空を突く
巨檣の端も雨にして
甲板望臺みな潮、
潮に涵り吹きあらぶ
貿易風を眞向に、
雷鼓轟くわだつみを
過ぐれば東亞空近く、
安南の沖夏五月
五日みどりの波のうへ
分れし水師めぐりあひ
鼓樂ふたゝび空ゆりて
艦隊ひとしく『皇帝』の名を。

世界あらたに目を瞠りぬ、
たぞ、成敗のあげつらひ、
曉清きあさ波に
照す雙鬢霜經しや、
なやみ海より深うして
一萬里外艨艟を
率ゐしほまれ朽ちせざれ、
『敵いま近しあゝ奮へ
一死なんぢの邦のため』
邦の望を大帝の
勅を身に負ふ大都督、

パタンの瀨戸を後にして
北斗是より夜々高く、
臺灣ひがしの海峽を
乘切るのちは支那の沖、
布かれし係蹄か運命か
秘密の手あり彼を引き、
驀地に向ふいやはての
關門あなたの對馬沖。

＊　＊　＊　＊　＊

白羽虛空をつんざきて
的に射集む矢の如く、
百川ともに東海に

溢るゝ水を入る如く、
世界ひとしくこゝに目を
注げ、滄溟波生れ
暗と光と渾沌の
胎より出でてわだつみの
夜と晝との天領を
わけしこのかたおほいなる
海の戰近きぬ。

緑波白浪風驅りて
地中海より眞西に
注ぐ太西洋の端

怒潮となりてうづく場、
波上の偉人(大英の
東郷)かれのいやはての
ほまれトラファルガーの水
水は遙に今呼びぬ、
『太平洋の波の友、
百年新に廻り來る
光榮なんぢの領の上』と。

※　※　※

裾三州の野にわたり
肩を紫雲の外に拔く
山か提督まじろかず、

龍泉太阿魔を碎き
干將莫邪妖を割く
斷は久しく定まれど、
重きをになふ雙の肩
霧たちこめて妖鯨の
暗に逃れん憂より
胸や千仞わだつみの
底をかへして湧きあがり
九天の碧ひたしうつ
波は思とみだれずや。
有象の海にあらしあり、
更に優れる心海の

惱無象の荒るゝ波
惱は常に聖なるを、
天地をおほふいさをしを、
讃せん前に嗚呼思へ
千載つねにおほいなる
惱に因りておほいなる
人と靈とを見るべしと。

空も苦惱の暗晴るゝ
此日五月の二十七、
遙かに沖の遠きより
妙華の春のおとづれは

歡呼とゞろく波のうへ
無線の電に馳けり來つ
提督起ちて一令を
傳へて拔ける千鈞の
錨のしづく三十里。
空は晴るれど海あらき
怒濤を蹴りてまつしぐら、
運命いづれ生か死か、
選いづれを厭はんや、
光榮ふたつの途に共。

嗚呼日本海夏の波

山とたちくる對馬沖、
上の無象の海にわく
時劫の潮また捲きて、
東西こゝにふたつの史、
一つにまじる大波瀾、
時やまさしく檀原
邦のもとゐのたちてより、
春秋互に移りくる
二千五百六十五、
おほいなるもの、高きもの
つねに滿つれど目に觸れず、
ひとり神秘の名によりて

暗にひらめく電光の
たゞ一線を世に洩らす
靈いまこゝに三萬の
身となり血となり肉となり
水師となりて鋼鐵の
生けるがなかにたつを見よ。
銀浪捲きて雪散りぬ、
汐は矢と射る東水道、
見よ今煤烟こくうに引ける
艨艟つゞく幾浬
末は濛氣に包まれて
露軍まさしく沖のあなた、

『皇國の興廢この役に
懸る』起てたて、嗚呼壯士、
たちて扶桑の精凝れる
武威を世界の目に示せ。

二萬の馬力潮蹴たて
甲鐵ひとつの脈ゆらぐ
『三笠』『敷島』『富士』『朝日』、
時はいたりぬ、威怒の靈
十有二吋の砲の口、
今雷霆をとゞろかせ、
『春日』『日進』あらたなる

力妖魔の膽を裂く、
九千餘噸の裝甲を
並べ波さく六の艦、
『淺間』『常磐』の霹靂に
『吾妻』『八雲』の威を競へ、
『出雲』『磐手』の切る猛火
未來の仇も震ふべく
金鐵粉を散らしめよ。

硝烟爆烟うづまきて
白日忽ち暗となり、
風輪狂ひてその暗を

忽ち拂ふ對馬沖、
强弩三千汐を射し
むかし何等のたはむれぞ、
鉛のあらし火のあらし
潮のあらし吹きあらぶ、
南壹岐島沖の島、
北は鬱陵竹の島、
天地はあげて百團の
焰に狂ふ霹靂車。

飛衞の覘切りはなつ
降魔の巨彈亂れ落ちて、

尺餘の鐵板蜂の巣と
碎かれ沈む『オスラビヤ』。
今また暗に先んずる
水雷砲火に威を添へて
進むさながら矢の如く、
『ボロヂノ』『スワロフ』先王の
名を負ふ友と相次ぎて
溶くる千仞の波の泡、
星は暗なる海のうへ、
探海燈のすさまじき
光めあてに碎かるゝ
『ソイキリキイ』『ナバリノウ』

あくる日降る運命を
暗の大潮捲き返し
流す『ニコラス』『アリヨール』
暗の大海暗の波
暗たゞ獨りあかしのみ、
鯨鯢下に駭きて
鬼神壯烈にために哭く
いさをの數を擧げ得んや、
雲蒸長く時ありし
二千餘年の國の粹。
一兵一士ことごとく

『勇の權化』と奮ひしを。

あゝ魯提督、一掬の
涙を君に捧ぐべく
扶桑の民に心あり
波また波の一萬里
東半球を横に斷ち、
雨にあらしに狂ひ立つ、
潮の山に半歳の
辛酸つゆも報はれず、
精を盡くせし鋼鐵の
三十餘艦、一萬の

水師をのせて悉く
みな龍王の犧牲か、
敵の一艦しづめ得ず
武運拙く捕はれし
君勇なしと曰ふは誰ぞ、
たゞ赫耀の朝光
妖雲拂ひて日の昇る
大東洋の東郷に
おもてに立ちし薄命を
嘆け――あゝ名は日本海
曠古のほまれ傳ふべく
十億五洲の民こぞり

胸のゆらぎを高うして
おとづれ待てる双の耳に
飛電のたよりかけり行け、
あゝ鵬の羽をのす處
あらしの海に戰爭の
ありしこのかた至高の名、
丈餘金剛の筆とりて
黃金の卷に刻むべく
世界歷史の靈よ起て、
今『光榮』は純白の
もすそを風に飄へし
波の緣の月桂の

冠さゝげて微笑むに。

富嶽之歌

※星

夕をかざる玉鈎の一彎遠く消沈み
暗人間の世に落ちて今は壺中の夜もなかば。

有聲無象の窮まりはこゝ穹窿の空の上
數も千萬永遠の姿を凝す星の花
わが射る光途遠く流るゝ末を見おろせば——
影朦朧のたゞなかに西崑崙の雲の嶺
冷い煙こほりうづまきて泰山暗し鬼神の府

羅浮天台のおもかげも今は下界の暗の底。
千里二千里三千里烟波眠れる東海の
うな原遠く眺めやるわれらの光さすところ
渾沌の世に湧き出でし姿不變の富士の嶺
太古の雪の膚清く暗を照して立てるかな。

あらしも今は收まりて人籟絶えぬさらばいざ
光と共にわが露を露もろともにわが歌を
下だし送らむ仙嶺の頂遠く裾廣く。

光含みて珠とこり珠とこほりて露と呼び
暗にもしるき香を添うるわれ銀臺の星の精
長松の蔭暗うして鶴の靜かに眠るとき
幽谷のあらし收まりて蘭の微かに匂ふとき
西に傾く銀漢の流の末と下り行く。

行くへは遠し東海の波まに近き富士の嶺
嶺に下れば白銀のまた黄金の水湛へ
麓に布けば花のへに帝鄕の夢もの語る。

嶺上明水

珠貫貝聯かげ凝ほり玉露となりて嶺の上
千古の雪のしたゝりも変へ湛ふる水かゞみ
映る光は仙嶺の夜半の星のこほる影
酌みて飛仙の盃の沆瀣の味思ふべく
餘滴靜かに谷あひに玉と碎けて走りては
行末遠く香を浮けて麓の花を誘ふべく。

花

高ねおろしの夕かぜに
われ咲き匂ふ花の子ら
こよひ御空の友そゝぐ
戀のしづくぞ身にしげき。

見渡す廣き八洲の
裾野の夜も靜かなり
かしらを垂れて行く水に
さゝやく思人やしる。

こゝに開きてこゝに笑み
こゝにしぼみてこゝに散り
過ぎし幾春幾千とせ
自然の子らと友なりき。

御いづかしきみこの手に
かざすうるぎに散る焰
滅びてすめるぎの
よさし廣みし世もむかし。

時おし移り紅に
白きは替る旗の色
君が裾野の狩りくらの
たけき競ひし樣もまた。

春のつばくら秋の雁
いそぢの驛の行返り
振ふ錦の花の袖
うつろひ行くもきのふにて。

いつしか布かる黒がねの
道に近づく西ひがし
烟あらしになびかせて
火輪かけかふ世の姿。

時は移りぬ人去りぬ
獨り裾野の花の子ら
替へぬむかしの香をとめて
胸にはつゝむ歌絶えず。

こよひしづくの身にしげき

御空の星の戀の歌
受けて傳へて行く水に
さゝやく思人しらじ。

流

銀蛇幾すぢ幽谷の泉しづかに集りて
ねは玲瓏の玉いくつ碎けて走る夜の空
西と東のいさら川流るゝ道に呼びつどへ
靈山の名を身に負ひて下るも長し六十里
けさは浮べぬ白帆かげ夕は洗ひぬ汀の日
今はた誘ふ一ひらの花にのせ行く星の夢
わだつみさして道遠く行けば流れん時も世も。

海

潮は通ふ東海の流みなぎる三千里
銀山砕け飛散りて行くへ四海の沖はるか
經緯度替るもゝの岸洗ひて歸る千重の波
波は明珠の影鏘りて光は震ふ星の色
いさりび時にほのめきて煙は迷ふ清見潟
夜深き岸の松が枝に仙女の樂は響かねど
こゝに流の送り來し花に無限の春の歌
あしたの光照りもせば我も自然の樂かなで
扶桑の鎭め靈山の姿を波に涵すべく。

其影宿す萬頃の東海の水下に見て
高ね下りし夕あらし無象の翼身は輕く
北斗の影も見えぬまで波路はるけし幾千里
椰子橄欖の香ににほふ南溟の空吹拂ひ
暖潮の蒸すむら雲のむらがる友をいざなひて
今こそ歸れあけぼのゝ空合近き富士のもと。

雲

歳のなかばは夜の暗、暗に替れる紅血の
日に氷山の影ゆるぎ浪もあらしも凝ほり行く
千古の冬の北洋の眺さびしき空の上
萬里を翔くる鵬の羽を忽ち借れる自在の身

南をさして驅け行けばよもより集ふ友の群
率ゐて寄せん東海の芙蓉の峯の空近く。

詩神

はやも下界の空しらむ時風雲のいざよひに
天地創生のあさぼらけ昔のあとぞ忍ばるゝ
暗は逃れて旭陽の光はじめて照りしとき
四大おの〳〵其則に就きて渾沌の去りしとき
われ九天の水引て東海萬石の波湛へ
玉闕の柱つんざきて芙蓉千仞の基おきぬ。
天地の間靈嶽の氣に嘶風の吹てより
黄鶴露を吸去りて秋白帝の樓に飛び
青鸞花を啣み來て春瑤臺の仙を乘せ
彩雲永く一帶の天衢に通ふ路引きて
神韻妙詩おのづから嶺に收まる數千秋
此邦いまだ此山を歌はん聲はあらずとも
玉露明星もろともに永く宇宙の靈に聽き
花蕚川流とこしへに中に不朽のしらべあり。
嗚呼、東海の君子國、史は百王の跡遠く
二千餘年の春ふけて斯文の華の遲くとも
香はかんばしき千載の末來の望無からんや、
群巒遠く下に見る芙蓉の姿雲の膚

清きは民の心たれ高きは民の思たれ。
積水洲を湛へてはうち蛟龍の湧くがごと
積塵山を築きてはかみ風雲を捲くがごと
長きに忍ぶ此邦の理想は實と現はれて
天地無窮の『美の靈』に民の融化の入らんとき、
扶桑の俗を改めて八朶の芙蓉比なき
影東海の波のへに萬邦の仰ぎ視なんとき、
其時今にほのみせて靈山の空明けわたる
見よ萬頃の海鳴りて波に黃金の花開け
紅雲錦の粧を凝らす朱陽の曙の色
希望の光うらわかく峯千秋の雪に照り

愛と匂と聲樂と皆ひとつなる天上の
無限の譽ほの見する富士の高峯のあさぼらけ。

(註)＊　弦月のこと。
＊＊　富嶽の項に「金明水」「銀明水」あり。
＊＊＊　星のこと。
＊＊＊＊"Beyond the starry dome, in realm of the blessed, Love,
Music and Fragrance are the same."——Anon.

Wenn ich nicht sinnen oder dichten soll,
so ist das Leben mir kein Leben mehr.
—Goethe.

La Muse est faite pour chanter l'ideal,
aimer l'humanite croire au progre's, et
prier pour L'infini.
—Hugo.

附錄

汀上の逍遙

ユーゴー作

第一　逍遙

すさまじき潮の底の渦卷の、
祕密の淵より湧き出でて、
みどりの波のたゞなかに、
泡沫のあらし雪と碎けぬ。

此飛沫の淵より神は何を造り給ふや、
曙の光りはこゝに何を注ぐや、夕の暗に何かこゝより出るや、

海はこゝに注ぐいたづらに其波を、
雲は其霧を、あらはしその響を。

あらしは其響と共に潮は其泥と共に過ぎさりぬ、
漁人の恐るゝ旋風は
このものすごき淵の中に現はれて
常に同じ場と同じ沫とを保つ。

漁人は語る、『かしこに尊き波の上に、
失せたる幼子は降誕節の夜を待ちて
人界に汚れし其翼を清めんと來る。
天使となりて天上に飛去る前に』と。

われは曰ふ『神は潮の先に、絶壁の先に
かしこにかく白き清らの場をおきぬ。
おほいなる自然の胸の中
惡のたゞなかに善の姿たらしめんため』と。

第二　道遙

海には泡、陸には沙、
みどりの中に黃金の光は白銀の光と混じぬ、
あれは洋々たる大氣のひゞきをきく
遂に沈默におほはるゝ遠き大なる響をきく。

咽く海の岸にひとりの幼子は歌へり、
何物もおほいならず、何物もちひさからず、
神は創造の上、受造の上に
同じ黄金の星と同じ緑の大空とを置きぬ。

われらの運命は微、われらの幻は美、
霊は身體を捕へて大空にあぐ、
人はおほいなる二つの翼もて飛べるもの、
ひとつの翼は思想他の翼は愛。

すべてのもの静まりて、厳然にやさしく、力あり

舟は港に入り鳥は巣に帰り
すべてのもの去りて休みにつきぬ、余は
大虚の中に無限の『愛』脈うつを覺えぬ。

たゞ風――彼は巖の上に蘆葉をかゞめ、
また歌へる幼子の聲をはこびさる、
嗚呼、風彼は草葉をかゞめ
また同時に遠く歌をはこびさるよ。

そは何かあらむ、こゝに物みな互に愛し互に睦む、
心の中に暗なかれ、にがき思の惱なかれ、
言につきせぬおほいなる平和は

絶えず大なる靈の底より大なる波の上に來去す。

第三　逍遙

日は傾きぬ、『夕』は彼を追ひて
地平線上を染めぬ、
汀上の石によりて白髮の一老翁
悄然落日に向ひて坐しぬ。

彼は老牧者なり山上の牧者なり。
昔はわかく貧しく幸なりき自由なりき、
夕の影丘陵をねぶりしとき
其笛林中に幾たびか響けり。

今は老いて富める過去のかたみ
彼はおほいなるやらかの長となりぬ、
牛羊野より歸り來るとき
世を離れて彼は天を思ふ。

沈まんとする日は昇らんとする日に劣らず、
老牧者はこのみどりの天の下にゆめむ、
目前の大洋は悠々く波を湛へて
墓に臨める義人の希望に似たり。

嗚呼、おごそかの時刻よ、山、海、風

悉く默して其騷ぎを收めぬ、
老翁は將に沈まんとする日を望み
日は將に終らんとする老翁を望む。

第四　逍遙

神よ影に染む山々いかに美はしき
海いかにやさしき、空いかにすめる、
過ぎ行く月日何かあらむ、
我は無限に觸れぬ我は永劫を見ぬ。

あらしよ、うれへよ、我靈の中に默だせ、
我心かくまで神に近づきしことあらざりき、

落日は焰の目もて我を見ぬ、
大いなる海我に語りぬ、われは身の聖きを覺ふ。
我を憎む者に幸あれ、我を愛する者に惠あれ、
我はわがすべての時を靈と愛とに與へむ、
譽を求むる者は愚なり理をあさる者は愚なり。
余――は余は只愛するを知るのみ、殘れる齡幾何もあらじ。

紅日沈みかゝる海上より星は出でぬ、
鳥は歌ひぬ、波は脚下に叫びぬ、
莊嚴のたゞなかに日は落ちゆきぬ、
あゝ見よ靈いかに大なる、人いかに小なる。

すべての造られしもの、燃ゆる火、震へる海
みな至上者の名をたゝなかば知るのみ、
彼等の發する響きを集むるはわれなり、
おの〳〵のものは片言を綴り余は全句を語る。

淵よ、爾と等しくわれ聲を天に揚ぐ、
海よ、我爾と共に夢む、山よ余爾と共に祈る、
自然は清淨永遠の香
余は――余は優美有情の香爐。

あらゆる非常の間にありて獨り生ある靈を見ずや。
猛獅を沙漠に逃げしむるものは我なり、
戸閉づるとき鍵を造るを知るものは我なり。
われはパツカスといひ、ノアといひ、デューカリオンといひ、
セイクスピヤといひ、パンニバルといひ、セイザアといひ、ダンテといひ、
勝利の劒を取り『影』を逐ひ、暗を驅りて、
あらゆる恐の中に入り、あらゆる暗の中に進む。
われプラトーとなりて能く見、
われニユートンとなりて能く探る。
光榮のアゼンスは鳴より出でずや、
壯大のローマは狼より起らずや。

大空の猛鷙驚きていふ、『わが途遂に爾におくる』と。

われ墓の中にキリストを有し塵の中にヂョブを有し。

衡平を保ちて兩手に肉と靈とを運ぶ。

われ遂に人なり主なり自由なり。

我は古のアダムなり、我よく愛し我よく知り我よく感ず。

我『生命の樹』を抱き、さながら嵐の呼吸の如く、

金果累々の枝を震ひて曰ふ

『民よ、走りて而して拾へ』と。

かくてあらゆる果物は雨の如くに落ちぬ。

わがため、わが子のため、人間のため、

科學は惠みの天より降り生命の果は永劫の根よりいづ。

あらゆるもの萌し、あらゆるもの育ち、

野火の林を掃ふが如く『進歩』は天を仰ぎて走り、

『過去』を呑み去りて萬物みな進み行く。

われ欲すれば物みな從ひ、不屈のもの悉く讓る、

われは全能の神に似たり、

彼は蜜を作り、われは酒を釀す。

先に獄なりしもの今は宮殿なり。

われ南極と北極とを結び、

靈を電光の翼に載せ、

ネムロッドの鐵弓を張り

鏑を鳴し矢を飛ばし、

四海に放ちてわが言となす。

距離なるものは今すでに存せず、

ライン、ガンヂス、オレゴンの流、
わが見るところ恰も同車の旅客の如し。
老いたる巨人其名は『望』といふもの、
我今之を矮人となしぬ。
わが奮進の前タイタン嫉みて頭をもたげ、
フランクリンの電光を飛ばすを見て、
コーカサス山上驚きの聲あり。
むかしヂユピタアが塵中に投せしもの今フルトンとなり、
鯨鯢を驅りて大海をわたる。
カルバニは『死』を滅し、
ボルタは天使の劍を熔かす。
世界はわが聲に震ひて替り、

カイン死して『未來』は若きアベルに似たり。
我再びエデンを得ん、われ再びバベルを興さん。
我なくば何ものか存せん、自然は初なり、我は終なり
嗚呼地球。爾の主なり王たる我を見ずや。

地球

爾はたゞわが一小虫なり。
睡眠、憂苦、冷熱、飢渴
爾は無數の煩を負はす。
爾老いては幻なり、死しては爾たゞ影なり。
爾は塵に去り、我は白晝に殘る。
われは常に春あり花あり、愛あり曙ありて、

千萬の年を經て猶わかし。
我一粒より大樹を作り、我一核より長松を起す。
我は葡萄の房を染め、或は黃穗の束をつかぬ。
晝の十二時夜の十二時、はでやかなる姉妹の如く
手を取り舞うてわがおもてを廻る。
我は源なり、混沌なり、われ物を葬りわれ物を創む。
綠の空に『朝』の生れしとき我そこにありき。

ウエスビアスはわが工場なり、ヘラク山はわが吹爐なり、
我はエトナの高き煙突を赤うす。
われクッコー山をゆるがせばピレネースの嶺また震ふ。
我に僕として星ひとつあり、
『夕』來りてわが一面に黑布を掛くる時は

やさしき月ありてわれを照す、
四人もし森の中に、暗の中に
影の中に逃るゝときは
我この燈を取りて彼を追ふ。
われ火の中、波の中、空の中に生を起して、
或は虫を生み、颶風を生み、鯨鯢を生む。
わが生ける圓球は大水深林高山に
掩はれて恰も冑を被るに似たり。

土星

微かにつぶやく聲は何ものぞ。
地球よ、爾一粒の砂、

かの一片の灰に伴はれて狹き境を廻る何の用ぞ。

我は壯大の綠空にわが大圓周を畫く

太虛は見てわが雄麗に驚く、

わが大寰は青白き空を紫にして

恰も金丸の如き七つの大月を抱く。

太陽

玄づまれもだせ大空のもとに、わが遊星よわが群臣よ、

我は牧者なり爾は牛羊なり、

二つの車大門を過ぐる如く

土星と地球と並びてわが最小の噴火口に入らむ。

混沌よ我は法なり泥よ、われは火なり、

見よ、われは生命なり中心なり、

太陽なり、永劫なる光のあらし也。

天狼星

あゝ此原子何をか語る、もだせ塵なる太陽、

もだせまぼろしよ微けき光よ、

其牛羊大空に散る牧者よ、遊星のあるじよ、

綠の空の中爾七八の牧をもてる何の效ぞ。

我は壯大なる圓球の中に百千の火球あり

其火球の小なるもの猶百の月を有せり。

あゝ夫の微球と並びてかゞやくも益なし。

矮人星は巨人星を知ることあらじ。

アルデバラン

天狼眠りぬ われ覺めぬ、かれは殆んど動かず、
我に白と赤と綠と三の太陽あり、
各〻世界の中心となりて無形の鎖に繫かりてめぐる。
其速きことさながら醉へる焔の如し、
電光は曰ふ『われ彼等に從ふこと能はず』と。

アークチユーラス

我に四の太陽あり、
其よつの光たゞ一道の電光をなす。

彗星

われは『夜』の恐なり彗星なり。
われ過ぐ、震へ衆世界よ衆太陽よ、
我見るところ爾はおの〻たゞ一粒の芥子なり。

北斗七星

神秘の腕われを常に大空にもたぐ。
われは北天の燈明臺七の枝を有するものなり。
わが火は一切の終る太虛のはしに目ざむ。
北極より南極に、あらゆる赤道のもと、
あらゆる熱帶のもと、あらゆる宇宙は曰ふ
『これ恐るべき極天の黑守兵なり』と。

暗き天空の清氣、衆圓球に滿つるもの、
かれ我の何たるを知らず。
我大空に目ざむる時彼われを見つめ、
大なる光われの進むとき、
彼たちて震ひて、わが進軍の響を聞かんとす。
彼われを天空にさまよふ巨獸と見なして
われに恐るべき名を與へぬ。
我は北なり、光なり、目なり
生ける七つの目、太陽を瞳子とするものなり、
永劫の暗に照る永劫の焰なり。
われは爾等の上に現ずる北斗七星なり。
天狼は其すべての圓球を合して

猶わが最小の爐中一點の火花に過ぎず。
我が二つの火の間に百千の世界は悠々としてあり。
われはひかる天空の頂に住む、
彗星の光もみどりの深空に轉ずるわが車に觸れじ。
天の衆星その黃金の球と
白銀の月とを曳いてこゝに來りかしこに去る、
我もし進んで夫の精氣の大海に入らば
一切の太陽皆わが途に碎けん。

黃道十二宮

爾の道わが道に比せば何かあらむ、
爾の光天のいづこより來るも

皆深淵の底盤たる我にあたる。
我は衆太陽にいふ『爾去れ』
『爾來れ』『今爾の順なり』『我爾を呼ぶ』と。
我こゝにありて人は綠の空の中に
弓、手に逐はれて猛獅、金牛、白羊の走るを見ん、
われまた秘密の井中にかの寶、瓶、をしづむ。
我は巨大の輪機なり。
無象の秩序われより出でて
かすかに光る深淵に下る、
人目もし空の深奥に入り、おほいなる恐のたゞなかに入らば。
聖きフレガートンの流に黑むイキションの如き
恐るべき罪人、苦しめるおほいなる魂を見ん。

かれらは高きに到らんとし、
あなたに走る星を棄てこなたに來る星に乘りて
深夜のすごき階段を上らん。

銀河

百萬、千萬、無量億の星、
すごき影の下、きよき覆ひの下、
我は莊嚴なる星宿の森なり、
我は目と光との集合なり、
さびしき、音なき光の厚みなり、
わがかゞやく淵は常に劫初の流に溢れて
あらゆる爾等衆星の源なり。

嗚呼、低きにある星よ、我は爾を去ること遠し、
わが宏大雄麗不動の海、
わが無數の太陽の集りは
鈍き爾の見るところ、たゞ大空の底にありて響の絶ゆる荒漠なり、
暗夜にひろがる紅灰の一片なり。
さはれ我が生ける光の中に入るものには何等の恐ぞ、
わが紅雲を近きに見るものには何等の恐ぞ。
點はおの〳〵星なり、星はおの〳〵太陽なり、
星限りなし、奇異壯大のもの限りなし、
或は天使に似たり、或は惡魔に似たり、
遊星の數はた窮なし。
宇宙の彩群内に情あるもの生あるもの、

おの〳〵一の太陽をめぐる、
人おの〳〵心あり靈ありて、
六合にわたる眼目の映ずる鏡なり。
心おの〳〵愛あり、靈おの〳〵天あり。
おの〳〵生れ、おの〳〵死し、おの〳〵長じ、おの〳〵衰ふ。
内に光滿ち、内に暗溢る。
わが下の谷の中、わが光に眩めきて
遠きにかゞやく光の粒
なんぢ衆星、爾周球、爾彗星、
爾黄道寰、爾震ひて青白き太虚をわたるもの、
爾の音は遠きに響く胡角に似たり。
我が太陽を有するは爾が蚊を有するよりも多し。

わが無限大は生けり、かゞやけり、豐なり。
時としては千萬の世界暗き穹窿の隅に迷うて
わが光の中に消し去るにあらずや。

星雲

遠きを去る一片の塵、なんぢ誰にか語る。
太虛の中我殆んど爾の聲をきかず、
我はたゞ爾を暗光として夜の綠の空に隅に知るのみ。
我をして靜に照らしめよ、我は暗の白きものなり、
すごき混沌の中に生ぜる幽界なり。
我は南極なし、北極なし、
我は理想中の生ける現實なり、

廣大なる夢の群われよりいづ。
浩蕩たる精氣の大洋、涯なく岸なく
其流一たび去りてまた歸ることなし、
中に神秘の島嶼を造るものは我なり。

無限

一切のもの、わが暗き合一の中に生く。

神

我一たび吹かば、萬有ことごとく空たらむ。

（譯者附記、固有名詞は皆英利吉讀みとなしたり、一定の日本讀みとなれるものは其まゝ）

故郷の墳墓

『冥想錄』を亡女のかたみにさゝぐる歌

ユーゴー作

一

永遠の眠の床より起ち、冷めたき布の蓋ひを去り、
目を擧げ手を開きて此書を取れ、
こを受くべきものは爾なり。

我が靈魂、わが企望、わが夢、わが恐、わが悲、みな此中に混じ。
わが生の幻、わが痛、わが光のあけぼの、また之に續ける愁の夕、
影とそのあらしと、薔薇とその花冠と、

みな此中にあり。
或は樂しき或は悲き此書はいづこより起れるや、
陰霧をつんざく青白き電光は何處より來れるや、
四歲このかた我は凄冷の風雨に住ひき、
此書はこゝより出で來りぬ、
神は口授しぬ、余は書き取りぬ。
余は風に散る一片の藁なりけり、
靈は曰ふ行けと、かくて余は去りぬ。
而してわが此書を終りしとき、
此書形をとりて初めて動きし時、
壁は綠蘿を纏ひ塔は挽歌に
鐘聲を混ずる野なかの寺は我に語りぬ、

『爾の歌は終りぬ、詩人よ、そを我に賜へ』と。

風吹き渡る碧の森また曰ふ『我そを請はむ』と。

花を點ずる牧野は曰ふ『そを我に賜へ』。

海はこの書の開くを見て曰ふ

『いかなれば我之を得ざる、かの書また一の舟なるものを』。

星は曰ふ『此讃歌を受くべきものはわれよ』と。

おほいなる風また叫びぬ『夢みる者よ、そを我に與へよ』。

しかしてあまたの鳥は曰ふ『人寰を遠く離れて育ちし此書、

君は人間に與へんとすや、翼に乘せてわが巣に運ばん』。

さもあらばあれ、わが書は風に與へざるべし、

あらしに狂ひて潮を呑吐する海洋また之を得ざるべし。

蜜蜂群がるみどりの野、

時その針を轉ずる野寺の塔、また之を得べからず。

之を得んもの牧場にあらず、星にあらず、

鷹にあらず鳩にあらず、すべての鳥にあらず、巣にあらず。

――われ之をたゞ墓に與へむ。

二

あゝ昔八月秋風の夕、

飄然友を捨てゝわれ鄕を去りき、

巴里の都はかなたに隱れぬ知人の影は一も見えず。

聲なく言葉なく見ることなく、われ獨り逃れぬ。

たゞこれ茫然たる一孤影。

たゞわれ知りぬ、われは其行くべき處に行かむ、と。

嗚呼『われ惱む』の聲猶わが口に出でざりき。
而して深谷の底に引き入れらるゝ如く、
路の險夷空の寒溫、われはつゆも覺えざりき。
(往事さながら夢に似て山嶽いたみて聲も無し)
母と姉妹と屋裏に哭せる時、
われは失望の力に驅られて起ち、
散髮を北風に亂して、
古寺の傍、蕭條の郊野に行き、
天を仰ぎて彼女の墓に近寄りぬ。
樹林は呟きぬ『來るは父なるものよ』と。
かくて荆榛を踏みわけて荒墳の間を過ぎ、
苔に掩はるゝ石の上、亂枝のなかにつきぬ、

あゝわれ呼びしとき爾の眠いかなれば覺めざりし。
一竿を肩にせる無心の漁父等は怪みて過ぎぬ、
『かの思に沈める、夢むるものやたぞ』と。
かくて日は暮れぬ、長く印せる地上の影と
夕づゝの光と前後共に消え失せて、
われ獨りわれに聽けるものに訴へつ、
其綠の草の上、わが晴天の暮れ行くを眺めし處に、
點々にがき涙と共にわが萬斛の愁をそゝぎぬ、
一片また一片、綠の葉を心ともなく摘みとりて
忍ぶは彼がいはけなかりし昔の日、
百合の花薔薇の花を我に持ち來りし時、

さゝやかの手にわが筆とりて、
くれなゐの指を染めつゝ笑みし時、
忍びてかくて墳上に育ちし花の香を嗅ぎて、
冷たき綠の床を見つめぬ。
其墳塋を貫ぬきて射しはそれか靈魂の光か、

さなり幽冥彼を奪ひしうれひの時刻、
傷心の空と悲痛の胸とに響けるとき、
妨げあらでわれかの墳を弔ひき。
あゝ今は……流よ、森よ、幽谷よ、彼女は知らむ（然らずや）
四歳このかた光照らざる淋しき心、われ行きて
かの墳上に祈らざる――そは我罪にあらざるを。

三

されば かの暗き路、みどりの苔、冷の墓、
陰林咽ぶ夕の野寺、
墳墓に注ぐ悼みの吐息、
その辛さは今しおもへば幸なりき。

この年ごろ爾何事をなしつるや、
暗きすみかの中、爾は生命を今見るや、
いかなる影の日時計もて爾は時を測るや、
爾は時に音なく他の眠れるものを押しやりしや、
爾はわれを待ちて半ば目ざめしや、
爾は無限の暗窓によりて影の中に旅人を探しつるや

暗き永劫の中に來れる者を聽かんとて
緩く纏ひし葬衣の中より爾は耳を傾けしや。
『そは誰ぞや、わが父いまだ來らじ』と。
かくて沈める船のごと再び暗に身を伏して
聲も微かに爾等ふたり共にわが上を語りしや。

げにいくたびか露を帶びて
庭より心よりわれはた百合花を集めけん、
げにいくたびかわれ野薔薇の花を集めけん、
いくたびか『明日は別れん』とつぶやきて、

アルフユールの塔にわれは訪れけん、
かくて愚にも風と迅き船とを待ちわびつ、

まなく我手は悲みて開きぬ我日ひぬ『もの皆移る』と、
かくて集めし花束は慘として暗夜に落ちぬ。
嗚呼彼女のわれを待ち佗びんを思ひ、
心に祕めし思を取りて
かしこに行かんものに託せんとせしも幾度ぞ、
基督呼びしときラザロは眼を開きにき、
われ彼に呼びしとき彼の目いかなれば開かざりし。
影の祕密をふたゝびも『愛』を破らんとなしつるは、
神のなしゝを父も爲さんと願ひしは、
そはあやまてる擧動なりきや。

四

微けきたよりの此書いかで

行きてかの沈静に呟き、かの岸に流れんことを、
愛の吐息愛の涙此書いかで
あなたに落ちて墓に入らんとを。
その墓さきには露と曙と春と接吻と
美はしき花嫁のゑみともろともに
わが喜、わが心を呑みさりきを。
いかで此書偽らぬ希望の叫、
嘆の歌、別の聲、
はた羽かせ我に觸るゝ夢とならんことを。
さらば彼女は曰はん『あるもの來りぬ、われ聲をきくと』
此書いかで暗夜の中わが靈魂の歩みたらんことを。

此書これ曙の白き鳥の、
はた夕暗の黑き鳥の飛びかけりあふ無數の群、
此書これ地平線外に走る『追憶』の翱飛、
此書これ囚居の戸よりわが送りやる渾沌の群。
空よあらしよ風よ雲よ、われ汝に之を託す。
玄づかに我に呟く空の大波
いかで此書をいとしみて遠くあなたに送れかし、
風は心して散すことなく
冷たき墓にまめやかに
離れて遠きわがたまものをいたせかし。
嗚呼、げにわびしき卷の中に。

大空の下に集めたるしらべの中に、
此書の中に、歌謠の中に
わが日、わが禍わが悲、わが煩悶
わが愛、わが勞、わが日々の生を記したれば
神なほいまだわれのみまかるを許さゞれば
さはれまた我行きて彼に語らん要あれば
祕密とあらしとに滿てる此書の上に
無限の劫風の吹くを我感すれば
人界の暗と哀へと思とを皆之の中に注ぎぬれば
わが靈わが血わが心より
此暗きさびしき歌の韻をわれの作りたれば
いざゆけわが書、暗空を過ぎて

あらゆる遲き歩みの向ふあなたに
木の葉の如くたましひの如く
行きて青苔と暗夜と墳塋とに飛べ、
一切の名あるものゝ皆はしり行く深淵に行け、
墳墓の最も幽深なるかしこに落ちよ、
さらば彼女の側に、かしこに眠る、光る莊嚴の天使の側に
見るものあらん此書の——此深淵の幽花の開くを。

五

あゝ曙のみどりの空、爾は我を欺きぬ、
あゝ人界の幸、爾をつくし我は償ひぬ、
世には墳墓に語るものあり、
さびしき青白き死者に語りて

葬衣の黒きひだを震はし、
其言或はあらく或はやさしく
石を動かし波を動かし雲を動かし
宛も森の響の如く自然の一の聲となるものあり、
我いまかゝる伴に加はるの權を得たり。

あゝわれ墓標のたゞなかを進み、
群木叢枝の中に髪を亂し、
靈魂暗に迷ひて棺上にうつむき、
鉛に釘に地上の蟲に、
冷かに笑める骸骨に、齒を喰ひしばる骸骨に、
指ひ圍まれる手に、頭骨に、

祈禱を知る脛骨に悟を索めしも幾度ぞ。
あゝ我すべてを穿ちぬ、すべての底を探らんとしぬ、
禍福いかなれば世にまじる、われ之を知らんと願ひき、
われ問ひぬ『我何をか信ずべき』と、
われ光と曙とほまれと
たのしき幼子と清き乙女と
愛と生命と靈魂と皆悉く之を究めぬ。

我何を學べりや、われすべてを攫みて一も得る處あらざりき
我多くの夜を見ぬ、我多くの空しきをなしぬ、
吾人何ものぞ、『つねに』の語は何の意味ぞ、
われ胸中に穿てる墓に

夢と愛と望とを皆悉く葬りぬ。
誰か悟を得る教いづくにある。
あゝ我ふたゝびいにしへに返り
草のうへ牧場のほとり森の傍、
夕焼の空にほゝゑみて幼きむすめの
白き小さき手を取りつ
喜に溢れ平和に満ち、
空のかゞやくにまかせ、小兒のあまゆるに任せ、
かの碧空とかの無心とに身の浸さるゝを感じ得ましかば。
光る大神と、敬ふ天使と
われ此間に争ひぬ、われ勝ちぬ、恐なかりき、悔なかりき。
幾にわが門『死』の前に

恐るべき暗影の不意の音づれに開けぬ。
あゝ神祕の靈、爾空しく碎けしものを殘して去りぬ、
爾わが天使を捕へぬ、爾彼を打ちぬ、
それよりこのかた墓はわが足の向ふ處となりぬ。

六

セイヌの岸の逍遙も今は叶はず、
われいにしへの道に今はえ行かじ
井のうへに座る洗ふ婦の如く
永劫の深淵の壁に突き當るの外はあらじ。
恐るべきソリムの爲め巴里はむれに閉されぬ、
ノートルダムの高塔は今沈默と暗夜とを有てるのみ。
而して頭上にわれは星辰の殿堂を仰ぐ、

吾は叫ぶ『ルーアン、キレキ、ユール、カアテベック』と、
『影』はわれに叫ぶ『オレブ、セドロン、バルベク』と、
而して吾去らんとすれば『影』直ちに我を留めて曰ふ、
『みどりの大空に向け』と、
われにいふ『爾の路は塞がりぬ、
爾いま夜と風と流とを見よ、
爾何をか思ふ、幽獨者、爾何をか爲す、
爾足下に大地ありと思ふや、
運命を離れて心ともなく爾何れに行かんとするや、
あゝ夢むる者、爾萬有天地を顧みて
波浪の中に靈魂の響を聞け、
爾もし世に意あらば顧みて俗界の煩惱を思へ、

爾もし髮に塵を混せんとせば
せめては巨大の塵を求めよ、
爾道の爲めに苦むも猶之を外にして
おほいなる寂滅を見よ（寂滅爾の意に適はゞ）。
爾專ら再びのぼるべき天上界に賴りて
そこに爾の一片の塵骸を捨てよ。
あゝ天より流竄せられしもの
手を故園の星辰界にのべよ、
爾その曙の再びかしこにあくるを見よ、
爾おほいなる一切を見るおほいなる眼となれ、
爾萬有の融化し終るかのおほいなる神秘を思へ、
うまるゝ、生ける、進める、亡べる、崩るゝ、

一切の人類、一切の墳塋を思へ』と。

さはれ我心常に痛む、其痛むほとり常に同じ。
蒼天暗夜永劫遂に
一の靈を亂し一の塵を靜むること能はず。
天上穹窿の莊嚴の光
以て涕を乾かすに足れりや。
あゝ天地は荒涼の墳墓、すみわたる夕、夢むる森、
やさしき月をわれに示すもかひ無しや、
我はしづかに之を聞きてしづかにやさしき眠に入らなん。

七

あゝ花を、あゝ花をわれ集め得ましかば、

われかの二の冷き床に百合の花を集め得ましかば
われ花をもてわが青白き天使を蓋ひ得ましかば。
花は金なり碧玉なり黃玉なり瑪瑙なり、
花のたゞなかにこそ棺は埋まるをねがはめ、
花は死者を愛す、神は其根をして
骨に觸れ其香をして靈に觸れしむ。
我かれを愛せしも今之をよくせざれば——
われのあなたに再び行くを神いま許したまはざれば——
冷き運命、彼我に迫りて父は悲み子は眠り
追寶われを苦めて墳塋彼をおほひぬれば——
今は一片の草葉をもわれ彼の無聲の墓に投ぐるを得ざれば——
されば彼女少くも我靈を得んこと善からずや。

あゝわが屋の上に叫ぶさびしき風よ、
あらしよ冬よ其雹もて我瓶を打てるものよ、
海よ夜よ――われ彼の爲に此書の中にわが靈を置きぬ。
此書を取りて而していへ『こはわが後に
殘りて夢むる生者より來ぬ』と。
魂よこの書を取りて遠く隔つとも我聲を知れ。
あゝ爾の灰は我が息みの床なり、
爾の墓はわが望なり、わが愛なり、わが信なり、
爾の葬衣は常に生命とわれとの間にひらめく。
いざ此書を取りてこゝより神聖の歌頌をおこせ。
爾の暗き手の中に此書いかでまぼろしとなれ、
此書わが天使の眼に照されて

曙のごとく白うなりゆけ、
吹く息にそだつ爐火の如く
夕に過ぎ行く光の如く
行きて流れて遠く跡なく
やがてすごくかゞやく爾の目の下に
書の幾丁星となりて皆暗中に去れよかし。

八

嗚呼人何を爲すも人何を語るも
其靈天馬の翼に飛ぶも
昆蟲と等しく地上に這ふも、
微かにひかるゲッセマネよ、人は常に
人は常に爾のさびしき洞窟に到らむ。

あゝつらき怪しき悽愴の巖、
靈魂と運命との爭ふ處。
慘憺たる造化の幽淵の戸口、
欲情の獸近より臨みて震ふ處、
更にあやしきすさまじき『憂』の
悄然として髮を亂して入る處。
あゝ墜落よ、隱退よ、幽谷の門よ、
ゆく〳〵我生の窮まり盡くる處、
歲月の泥に印せる吾人の歩み止まる處。
禍ことに重うして松柏のうれひ悲む處、
陰影陽光相まじりて天使の驚き震ふ處。

吾人はつねに此幽居に來りこゝに思にたへず悄として曰はず。
あゝ逝ける者安かれよ、眠れ眠れ眠れ眠れ、
しづかに形を替ふる渾沌無數の群、
眠れや野に眠れや花、眠れや墓、
眠れ人家の屋壁、墳塋の堆石、
眠れ林下落葉の堆、眠れ巢中羽毛の片、
眠れ眠れ草葉の微片、眠れおほいなる無窮の群、
しづまれあらゆる樹木あらゆる草、
しづまれ悶え湧きたつ大洋の波、
しづかに聲なき死者の沈默、

莊嚴神聖なる敬神の畏、皆悉く休へよ、
恐るべき疑、おほいなる不信の暗、
おそろしき沈默幽微のもの、
自然、中心、周圍內外。
一切の渾沌、上帝の幽獨、皆悉く靜かなれよ。
あゝ霧深き呼吸に走る塵界の民、
あゝ原上を走るものすごき步、しづまれよ。
眠れ爾泣くもの、眠れ爾傷つけるもの、
憂』よ、『憂』よ、『憂』よ、爾の聖き眼を閉ざせ、
あらゆるもの宗教なり、侮慢のもの一もあるとなし。
あらゆる生物のうへ、あらゆる受造のうへ、
あらゆる醜惡禍福のうへ、

やさしき、はげしき、うるはしき、いやしきすべての上、
見よ、おほいない天の平和の四方より降るを。
あゝ眠れる地獄は天堂を夢みるよ、
流よ海よ風よ魂よ、皆ことごとく靜なれ、
見よ、今上帝の前山嶽の上、
絕崖の側にたちて星と人間と
天上の萬事と暗空の彗星と
あらゆる渾沌とあらゆる萬有との現はるゝを見る處。
暗に眩ひ惑に醉ひ、
無限の大空に天象の畫かるゝを見て
傷み惱める、さはれ、思は澄める冥想の人。
鋼鐵の壁上に人生の問題をしるし

怪奇渾沌のたゞなかに曉を見んとして
震ひて茫洋の深崖にたち、
かけり飛び行く白鳥の目を追ひて
慘として光と色と曙とに伴はれて
烟露うづまく幽谷のほのかに現はれいづるを見る。

（一千八百五十五年十一月二日ゲルンセイの謫居に於て）

（註）一千八百四十三年二月十五日ユーゴーの長女レチボルデイン其戀人シヤルル、ブツケリイに嫁して平和幸福の生を送りしが同年九月四日過ちて夫妻共にセイヌ河に溺死しぬ、本篇中「爾等二人」等の句は此夫妻を指す也。

明治三十四年五月十四日印刷
明治三十四年五月廿日發行
明治四十五年二月七日十一版

曉鐘奥附
（定價金四拾五錢）

著者兼發行者　土井林吉　仙臺市本荒町二十九番地
印刷者　水谷景長　東京市小石川區久堅町百八番地
印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地

著作權所有

發賣所　神田區表神保町十三番地　東京堂

◉河岡潮風君三快著◉

1 五洲怪奇譚

全一冊四六判　四百餘頁　正價金五十錢　郵稅金六錢

五洲と云ふすでに壯也。怪奇譚と云ふに至つては更に〳〵驚くべく、怒るべく、笑ふべき物語に滿つ。勇敢を愛する青少年諸君は是非讀まざるべからず。小杉未醒君の挿繪八葉、また錦上花を添ふ。

2 冒險英雄傳

全一冊三六判　二百八十頁　正價金廿八錢　郵稅金四錢

セシルローズ、クライブ、スタンレーを始めとして、山田長政、沖眞介に至るまでズラリとならんだ十餘人。みんなタダでは死ねぬ男なり。實に面白い本だ。未醒君挿繪。

3 少年雄辯術

全一冊三六判　二百八十頁　正價金廿八錢　郵稅金四錢

これまでの雄辯術、演說法の數は、みな高尙過ぎるか、平易すぎて少年には何もならなかつた。本書は著者の實驗に基いて著されたる良書。サア評判ぢやく。

◀博文館發行▶

河岡潮風君著

快男快拳錄

杉浦非水君裝幀

世上を打ち見渡せばさても〳〵平凡な人間共の多きかな。その存在は寸毫も國家社會に影響せず、醉生夢死、空しく米食ひ蟲と化し、人糞製造器となる。

奈翁嘆じて云ふ『伊太利の人口二千萬。而してわれこの中より二人の武將を見出したるのみ』と。あゝ人多くして人少なし。多きは平凡人也。少なきは役に立つ快男兒也。

本書は現日本七千萬人中より選みたる約四十の快男兒が、破天荒の快擧を爲したる物語を集めたるもの、苟しくも紅い血の流れてゐる人は是非讀んで見ねばならぬ。未醒畵伯の挿繪もあつてなか〳〵美本ぢや。

▲春浪漁史痛快五譚　▲貧民の親友中村長髮將軍
▲失戀の友を救ひし俠大學生　▲金權に阿從せぬ江戸ッ兒洗濯屋
▲腹へ貯金する布袋知事　▲日本留學生の復讐
▲有地閣下の拳固　▲支那革命に行つた中學生
▲座禪堂で躍つた虎髯　▲成城學校の二豪傑
▲後藤武夫君の奮鬪振り——外二十數件——

定價五十五錢郵稅六錢

神田區表神保町　東京堂發賣

見よや本書の兄弟編！!!!!

河岡潮風君著

書生界名物男

（再版）

〜書生々々と輕蔑するな

大臣參議ももと書生

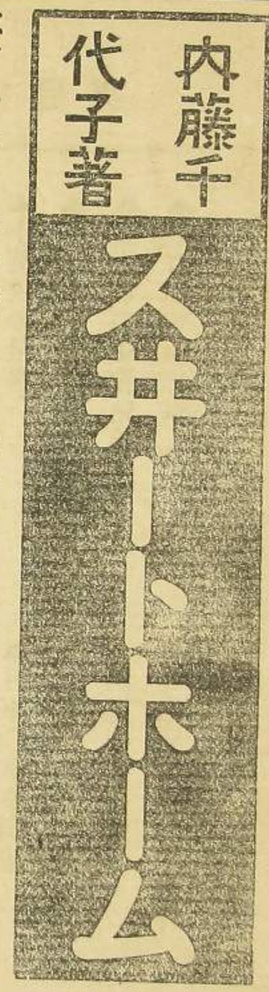
天下の書生は皆な英雄の卵で御座る。書生がエラクならんでは日本は滅亡ぢや。人生の三分の二以上を經過して仕舞つた先輩老人よりも、白面の書生の中に有望の英才がゐる。十人に一人の傑物、百人に一人の名物男……本書はその名物男の逸話奇行、冒險譚、失敗譚等を集めたもので、本書の讀者は是非讀まねばならぬ。小杉未醒畫伯の挿繪また頗る振つてゐる。

重要目次

▲蠻勇化身吉岡彌次將軍
▲貴公子連の蠻カラ旅行
▲惡僧釜うで物語
▲小英雄の最後
▲ハイカラ令孃を罵倒して支那革命軍に入りし奇才
▲海陸軍の硬骨兄弟
▲膽力塾年中行事
▲帝大法科の獨眼龍
▲山岳會の秀才大學生
▲巖窟の苦學生
▲月下の鐵拳制裁
▲決死の七高選手
▲其他痛快事二十七件

發行所　東京本郷區東片町十番地　本郷書院

『ホネームーン』に醉はされし諸君は見よ！



杉浦非水畫伯裝幀
定價金六十五錢

昔は加賀の千代女あり、俳名天下に洽ねく、人みなその大才に驚く。後一百五十年にして明治文界の單調寂寞を破れるものに内藤千代子あり。未だ一日も校門をくぐらず、文章の師につかずして天性の鬼才よく、妙齢にして潑辣たる名文を草す。まことに聖代の奇蹟ならずや。

處女作スキートホームはすでに好評湧くが如く重版、また重版、底止する處を知らず、都下の女學生は其の初版を珍藏し『千代子式』の文。『スキートホーム式』のスタイルなど新流行語となれりと云ふ。反響の大なりし事以て知らるべき也。女流に天才なしと嘲る人々よ。乞ふ來りて卿らの活眼を開き本書の第一頁を繙かれん事を。敬白

次目

▼スキートホーム　▼天女降臨
▼おてんば娘　▼ハーモニカ
▼少女の戀　▼松風
▼嫁がぬ人　▼夢より醒めた女
▼湖畔吟　▼もゆるおもひ

新たなる一葉わが讀書界に現はれたり！

忽ち五版

内藤千代子著

ホネームーン

定價スキート
ホームに同じ

文壇の老將大町桂月氏

伊豆山溫泉より書を寄せて

ホネームーン御惠贈に預り難有拜受、半白の中老人血と肉とは最早ホネームーンの語に躍り不申、まづ鵠沼日記を讀み申候。初島田初涙のあたり文情絶世。二回までも海水浴に出かけたる處、松より外には木のなき荒濱に松茸ならでかゝる才女ありとは掛けても思ひ候はんや。次に卷頭の文に移り、とう〳〵昨夜中に殘らず讀んで仕舞ひ申候。寂寞たる旅の空、おかげさまで面白く一日を過し申候。この書一讀いたし候へば向陵萬歲と靑春の血を躍らす男多かるべく、さるにても罪の深かき才女に候かな　（一月九日桂月）

目次

▲卷頭ホネームーン……杉浦非水畫伯挿繪
▲華嚴行
▲紅葉
▲華族系
▲若き日の戲れ
▲靑葉の蔭
▲現代の人より
▲學生の部會
▲逝く春の乙女
▲ゼラニアム
▲花つみの夢
▲鵠沼日記
▲コスモスの頃
▲帝劇の一夜
▲卷末虛榮の都へ！（これもまた長編）

【博文館發行】

見よ二十三日間に五版を重ぬ！

文學博士 森鷗外君
醫學博士 坪谷水哉君
巖谷小波君 序文

今井翠巖君著 ▼新刊▲ 博文館發行

最近調査 女子東京遊學案内

全一冊 洋裝四六判美本 紙數七百頁 各學校寫眞版挿入
正價 金五十八錢
郵稅 金拾錢

本書は都下二百有餘の學校を其の組織學則教授法より監督法束脩月謝の細項に至るまで實地調査をなし最も正確に最も詳密に左記各項に分ちて說示せり故に在京學生は勿論將に東京に遊學せんと志す者の必讀すべき絕好羅針盤たるべく又以て教育界の大勢を窺ふことを得べければ各學校經營上最良の參考書なり

●附錄＝最新東京實測明細地圖＝購讀者特待券

本書目次

◎遊學者指針＝△上京の準備△學校の種類と選擇△受驗と入學の心得△各學校修業の年限△學費の豫算△上京の注意△着京後の注意△宿所の選擇△衞生上の注意△圖書館と博物館△卒業後の心得
◎各種學校規則＝△高等專門及高等普通女學校△教育△技藝及裁縫△音樂及美術△外國語學△宗敎及宗敎主義△醫學産婆及看護△商業及簿記△雜種

▲日本の家庭雜誌中で一番古い歷史と經驗とを持つ點▼
▲書くことが穩便で高尙で面白い有益な材料を揭せる點▼
▲『スヰートホーム』を讀む人は必ず本誌を御覽なさい▼

■雜誌家庭之友の特色■

毎月一回 一日發行

家庭之友

發行部數が澤山で一方に偏せぬ故に主人にも主婦にも老人にも子供にも家庭一同が團欒して面白おかしく樂しみ乍らの讀物は本誌が一番です

振替東京三二四〇番
東京市本郷區丸山町
新公論社
定價 郵稅共 一冊 金拾壹錢 六冊 金六拾錢 十二冊 壹圓八錢

◎澁川玄耳著 ◎名取春仙畫 ○木版石版卅五枚入

日本神典 古事記噺

美裝全一冊 定價 金九拾五錢 郵稅 金拾錢

▼本書の内容

▼本書の體裁

▼本書の文章

▼本書の讀者

▼本書の感化

▼本書の挿畫

日本の神典にして最古の歴史、文學たる「古事記」を採て主材とし日本書記以下の古書逸文を傍架として我國體の精華、民性の特質を證すべき話説を結成せり

古事記噺は小説に非ずお伽話にも非ず演義にも講説にも非ず飜譯にも非ず著者獨創の意匠に成れる一種の噺にして典據正確趣味津々奇警と典雅とを兼ね、俳味禪味交々湧きて景情の妙を盡す著者の筆致既に定評あり殊に神話を叙するに於て飄逸自在

青年兒童の讀物として適當なるは勿論壯大老熟の人も亦之を繙かば卷を措くに忍びざるべく輕々讀過の後高古の妙趣に醉ふ者あらん

彼の動もすれば女々しき自暴自棄の惡思潮に溺れんとする者本書を讀まば雄々しく晴れやかなる神代の心と和して日本國民たるの幸福を自覺せん

我國上代風俗の研究に興味を有する名取春仙氏が特に心持好く出來たりと自ら許せる三十五枚の挿畫は本文と對照して一段の興味を生ず

發行所 東京市小石川區久堅町 精美堂 發賣元 東京市日本橋區本町 博文館

太田三郎先生著并畫

草花繪物語

■金緣絹紬表裝堅牢箱入■

定價金壹圓五拾錢郵稅金拾錢

▲草花繪物語は、其技既に世に定評ある太田三郎先生か、東西洋諸國に殘れる花の傳説を、華麗なる文と清新なる繪とに依つて物語られたる、花の如き花の書也。

▲平明流暢の筆に一味靄然たる溫情を載せて描き出されし戀や、涙や、力や、死や、美や、夢や、其物語の如何に痛切に現代の人のうち若き心に響き渡るかは、素より弊堂の喞々を要せざるところ。

▲更に其繪畫に至つては、無慮百面悉く之れ苦心慘憺の作。加之その描畫の材料は皆其種類を異へ、油繪、水彩畫、鉛筆畫、毛筆畫、ペン畫等あらゆる畫法に依つて、其蘊蓄を遺憾なく傾注せられたるもの、多技多能、事として適せざる無き才人の、炯欄花の如き面目は躍如として此の卷に生動せり。

▲猶これが復製に就ては弊堂の最も意を用ひたる所にして其作品の多樣なるが如く製版の術も亦三色版、石版、亞鉛凸版、手刷極彩色木版、寫眞版、コロタイプ版の類、現今の文明が爲し能ふ限りの技術を應用したり而して各種皆其專門の名手巧工を撰んで費用吝まず時を厭はず偏に其特技を發揮せしめん事をのみ之れ慮れり。潛かに誇らくは觀者これに依つて、親しく先生の肉筆に接すると寸毫の差異なき興味を享受するを得られんか、敢て此書を現代紳士淑青年男女諸君の座右に獻ず。

發行所 東京市小石川區 精美堂 ―― 發賣元 東京市日本橋區本町 博文館

木崎正道君著

少年劍舞大全

（三六判頗る美本美麗口畫二葉入）

劍舞術の書物はヤケに澤山發行されたけれど、こんなに寫生圖が多くて說明の平易なのは未だ出なかつた。著者は神田區で道場を開き、數百の少年を敎へてゐる。この人にして此著あり。吾徒は別に多言を費さなくてもよからうと思ふ。寫生は山中古洞畫伯。サア評判〻〻〻

定價卅錢郵稅四錢　博文館